

豊橋市制施行100周年記念

校区のあゆみ

# 汐田

豊橋校区史

47

*Shiota*













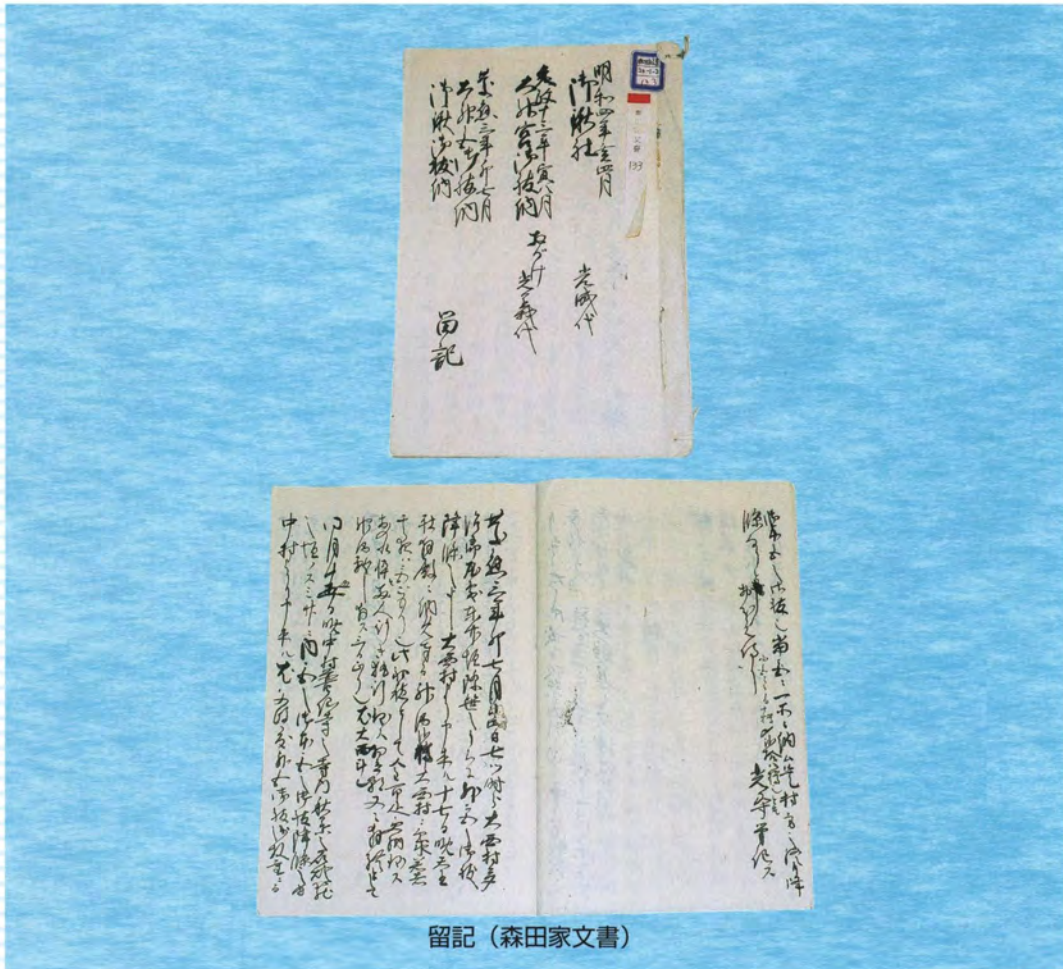




# 豊橋市制施行100周年記念

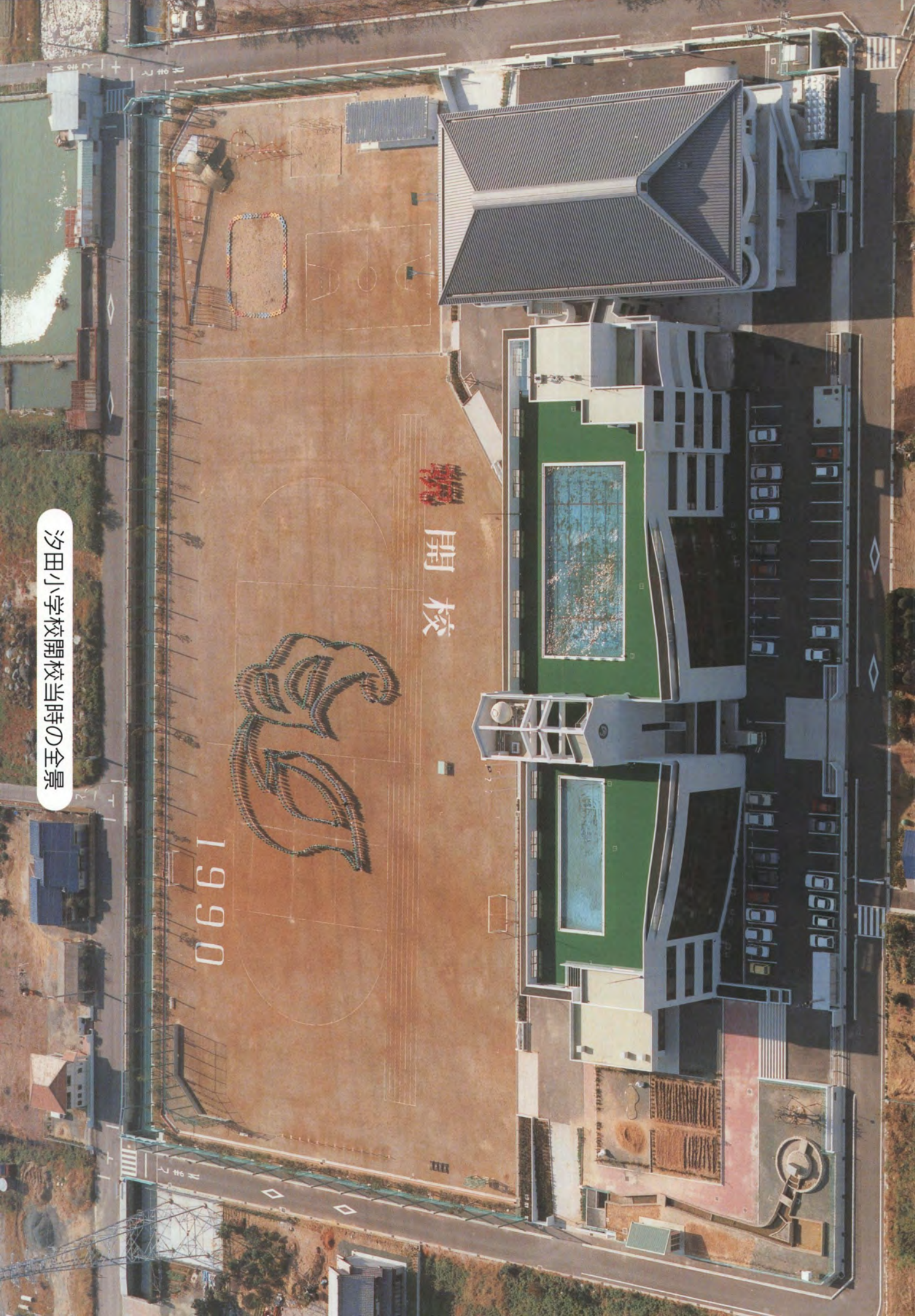
## 校区のあゆみ

# 汐田



留記（森田家文書）





汐田小学校開校当時の全景





神輿渡御

礼祭宮幡八呂牟

# 祭幸神



稚児の神楽(御旅所)



力角事神



浦安の舞(御旅所)





校舎と体育館



校舎

# 汐田小学校

1990年 開校



学校正門



# 発刊によせて



平成18年度  
豊橋市総代会長

西 義 雄

このたび、豊橋市制施行100周年を記念し、「豊橋校区史～校区のあゆみ」を発刊する運びとなりました。皆様のご協力により記念事業に素晴らしい彩りを添えることができましたことを、心よりうれしく思います。

この事業は、100年の節目を契機に地域の歴史や文化、自然などを改めて見つめ直し、将来の夢に思いを馳せていただくものであり、51校区すべてが足並みを揃え発刊できたことに、たいへん大きな意義を感じています。また、各校区におきましては、編集委員を中心に多くの地域住民の皆さんが資料の収集や原稿の執筆などに携わられたことと思えます。こうした取組みを通し、地域の絆がさらに深まったものと考えています。

地域イベントの開催を含め「市民が主役」を合言葉に行政と協働で進めてきた100周年記念事業ですが、多くの地域住民の方々が様々な形で挙って参加できたことが何よりの成果であったと思えます。今後におきましても、この100周年記念事業を一過性のものに終わらせるのではなく、次の100年に繋げていかなければならないと考えています。

最後に、本校区史の発刊にあたり、多大なご協力を頂いた多くの皆様に改めてお礼を申し上げます、ごあいさつとさせていただきます。



平成18年度  
汐田校区総代会長

河 合 正 敏

このたび、豊橋市制施行100周年を迎え、その記念事業の一環として市総代会において『校区のあゆみ』の発行が計画されました。

私達の校区は、牟呂校区から平成2年4月に分離し、東脇、松島、西部の3町で構成され、汐田校区が設立されました。

昭和33年から始まった東脇地区の区画整理事業により、田畑や森は少なくなりましたが、道路は整備拡幅され、高いマンション等が林立しています。一方柳生川南部も区画整理計画が進んでおり、松島地区も大きく変わろうとしています。

古く、牟呂八幡宮の行事などについては400年以上も前から続く伝統あるものです。これを後世に伝えていくことは大切なことだと考えています。

更に、校区で行われる諸行事にも校区の多くの方々の積極的な参加を頂き、絆を強くしていきたいと考えています。

この本の中から我々祖先の人々の生活に思いをめぐらし、また、私達の住む校区を愛する心をはぐくんでくださることを強く願っています。

最後に、この出版に際し校区の方々のご協力と、執筆してくださった方々に感謝いたします。



# 目次

# CONTENTS

## 第1章 自然と環境

- 1 汐田校区のようす ..... 7
  - (1) 位置 ..... 7
  - (2) 自然 ..... 7
  - (3) 気候 ..... 8
  - (4) 交通 ..... 8

## 第2章 歴史と生活

- 1 原始・古代 ..... 9
  - (1) 汐田校区の祖先の足跡 ..... 9
  - (2) 牟留天神 ..... 13
  - (3) 楠本天神 ..... 13
- 2 中世 ..... 13
  - (1) 牟呂八幡宮の勧請 ..... 13
  - (2) 神事角力 ..... 13
  - (3) 宮座 ..... 14
  - (4) 神宮寺 ..... 14
- 3 近世 ..... 14
  - (1) 松島新田・富田新田の開拓 ..... 14
  - (2) 柳生川 ..... 15
  - (3) 寺子屋 ..... 15
  - (4) 神社・寺院 ..... 16
- 4 近代 ..... 17
  - (1) 奥山新田の開拓 ..... 17
  - (2) 耕地整理 ..... 17
  - (3) 東南海・三河地震 ..... 18
  - (4) 豊橋空襲 ..... 18
- 5 現代 ..... 19
  - (1) 13号台風・伊勢湾台風 ..... 19
  - (2) 柳生川沿線・柳生川南部  
土地区画整理事業 ..... 19
  - (3) 汐田校区の誕生 ..... 20
  - (4) 団地 ..... 22
- 6 産業 ..... 22
  - (1) 農業 ..... 22
  - (2) 漁業 ..... 23
  - (3) 工業 ..... 25
  - (4) 商業 ..... 26

## 第3章 教育と文化

- 1 文化 ..... 27
  - (1) 校区の文化活動 ..... 27
  - (2) 学校教育 ..... 30
  - (3) 汐田小学校のあゆみ ..... 32

## 第4章 民俗

- 1 役行者 ..... 38
- 2 荒神講 ..... 38
- 3 草相撲 ..... 39
- 4 庚申講 ..... 40
- 5 秋葉講 ..... 42
- 6 神送 ..... 42

汐田校区歴史写真集 ..... 43

汐田校区旧字名略図 ..... 51

編集後記 ..... 52

## 巻頭図版目次

- ・ 校区航空写真
- ・ 留記（森田家文書）
- ・ 開校時の汐田小学校
- ・ 牟呂八幡宮祭礼の神幸祭

校区の位置



表紙：柳生川

平成18年2月、元浜橋から上流をのぞむ。

本扉：留記

留記は、牟呂八幡宮の宮司で平田派の国学者でもあった森田光尋師により、慶応3年のお札降りその他のことが、詳細に記録されている文献で、豊橋市指定文化財となっている。



# 第1章 自然と環境

## 1 汐田校区のようす

### (1) 位置

豊橋市の西部に位置し、牟呂の台地からその南部の柳生川を中心に広がる土地がおもに汐田校区で、東西約1.6km、南北約1.5kmで、面積は約1.5km<sup>2</sup>である。汐田小学校は、東経137度21分47秒、北緯34度44分49秒で、豊橋市立牟呂小学校の東南約650mにあたる。



位置図

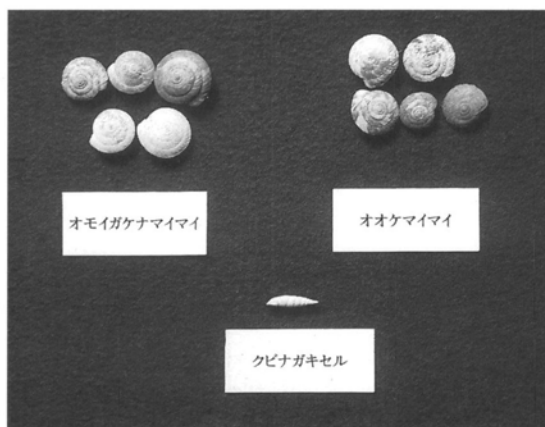
### (2) 自然



牟呂八幡宮の社叢

愛知県環境保護林第10号に指定されている牟呂八幡宮の森は、シイ、エノ木、タブノ木、クスノ木の高木のほかに、ヤブツバキ、イチヨウノ木などもある。

また、森の中には貴重なオオケマイマイ、オモイガケナマイマイ、クビナガギセルなどの陸貝が生息していて、雨の多い5・6月頃に見ることができる。



森の中に生息する陸貝の殻

柳生川沿線の区画整理開始前の東脇はどの家も屋敷林があり、木が茂っていて南の垂れに八幡水をはじめ、きれいな清水が数箇所湧き出していた。

昭和15年(1940)頃より前のダイイチ自動車学校のあたりは大きな沼地で葦や蒲・真菰などが生い茂りクワイなどの水生植物もあった。クロモ、シャジクモ、ヤナギモなども小川に生えていて、魚はフナ、メダカ、ウナギ、ドジョウなどもいた。また、水生動物のタガメやタイコウチ、ゲンゴロウもあり、富田川には、シジミやハゼに似た黒い体(ゲンキロとっていた)のドンコという魚であろうか



多くが生息していた。

鳥も民家の近くでは、メジロ、ウグイス、ツバメ、モズなどもいた。野や川では、ヒバリ、セキレイ、ヨシキリ、カモ、サギなどが見られた。



富田川近くの沼地

田や畑の昆虫は、イナゴ、モンシロチョウ、アゲハチョウ、トンボなどがいた。

森ではカブトムシ、クワガタムシ、カナブン、タマムシなどもいた。夏期の夕方は、蛙の合唱や蛍の乱舞があった。

### (3) 気候

汐田校区は、冬期は、西又は北西の季節風が強く、いわゆる伊吹嵐おろしという風が強い。5月頃から9月頃まで南寄りの風が多く、10月頃から北寄りの風が変わる。

降雨量は、年間1500mm程度で、6月～10月の間が最も多く、12月は少ない。雪は少なくて、地面が白くなる程度が年2～3回である。

気温は、全体に温暖で年間の平均気温は15～16度で、夏期は海をひかえて比較的涼しい。1月の平均気温は5～6度であるが、季節風が強く吹き、体感温度は低く感じる。

### (4) 交通

志香須賀しかすがの渡し（9～10世紀頃は豊川河口にあり、かつての東海道であった）で坂津へ上陸した旅人はおそらく、花田、松山、高師

から遠州（静岡県西部）へと進んだものと思う。一方、裏町に当たる汐田校区では、奥郡（渥美郡）へ行く道には江戸時代の延宝8年（1680）の絵図面によると柳生川に橋はなく、市場・松島間は渡しであったことが想像される。



福井自動車『豊橋のいまむかし』

明治、大正の馬車輸送の時代から昭和元年（1926）、福井自動車が牟呂市場と豊橋市公会堂間をバス運行させた時に、東脇の往還を通行している。同12年（1937）に立花自動車が継続し、その後は豊橋鉄道のバスが運行している。平成に入ってJR豊橋駅西口を基点とした小型のシャトルバスが牟呂循環線として運行、本数も多くなり、西部団地うかいを迂回するようにもなった。



牟呂循環バス



## 第2章 歴史と生活

### 1 原始・古代

#### (1) 汐田校区の祖先の足跡

##### －原始・古代から近世の遺跡－

**位置と環境** 汐田地区にある旧石器・縄文時代から江戸時代にかけての祖先が暮らしていた遺跡は、汐田校区のなかでは東脇地区の洪積台地に集中している。この洪積台地は、豊橋市街地がある東から西方向の渥美湾に突出した小半島台地で、標高4～10mである。北側に豊川、南側には柳生川が台地を挟むように渥美湾へ注いでいる。

東脇地区はこの小半島台地の東南部に位置し、南部には柳生川下流域の沖積地が広がっている。洪積台地と沖積地との比高は2～3mあり、台地裾部は急な崖面を成し、崖錐には10か所程の湧水地があった。

汐田校区の遺跡数は、現在42か所が確認されており、そのほとんどが柳生川沿いの洪積台地縁端部に分布している。

**原始** 汐田校区において最も古い遺物は、約14000年前の旧石器時代の石器で、見丁塚F遺跡（『東脇遺跡群』）の古墳時代の竪穴住居址内の埋土から縦長剥片が2点出土している。

縄文時代の遺跡は、見丁塚F遺跡、見丁塚G遺跡、王塚貝塚、東脇三味貝塚、見丁塚貝塚、東脇A貝塚、権現神社遺跡、行合遺跡、行合前貝塚の9か所がある。これらの遺跡から約3000～2300年前の後期から晩期にかけての深鉢形土器の破片が出土している。なお、いずれも遺構に伴って見出されたものはない。



見丁塚遺跡群（南方から）

弥生時代の遺跡は縄文時代に比べて半減し、見丁塚F遺跡、東脇A貝塚、東脇B遺跡、行合遺跡の4か所となる。東脇B遺跡からは竪穴とおぼしき遺構内から約2100年前の中期前葉の壺形土器、見丁塚F遺跡からは方形周溝墓（お墓）の溝内から約2000年前の中期の壺形土器、そして、東脇A貝塚の貝層中からは約2100～1700年前の中期から後期の壺形・高坏形・甕形の土器が出土している。



東脇貝塚（東方から）

**古代** 古墳時代の遺跡は、見丁塚A遺跡、見丁塚F遺跡、見丁塚G遺跡、見丁塚H遺跡、

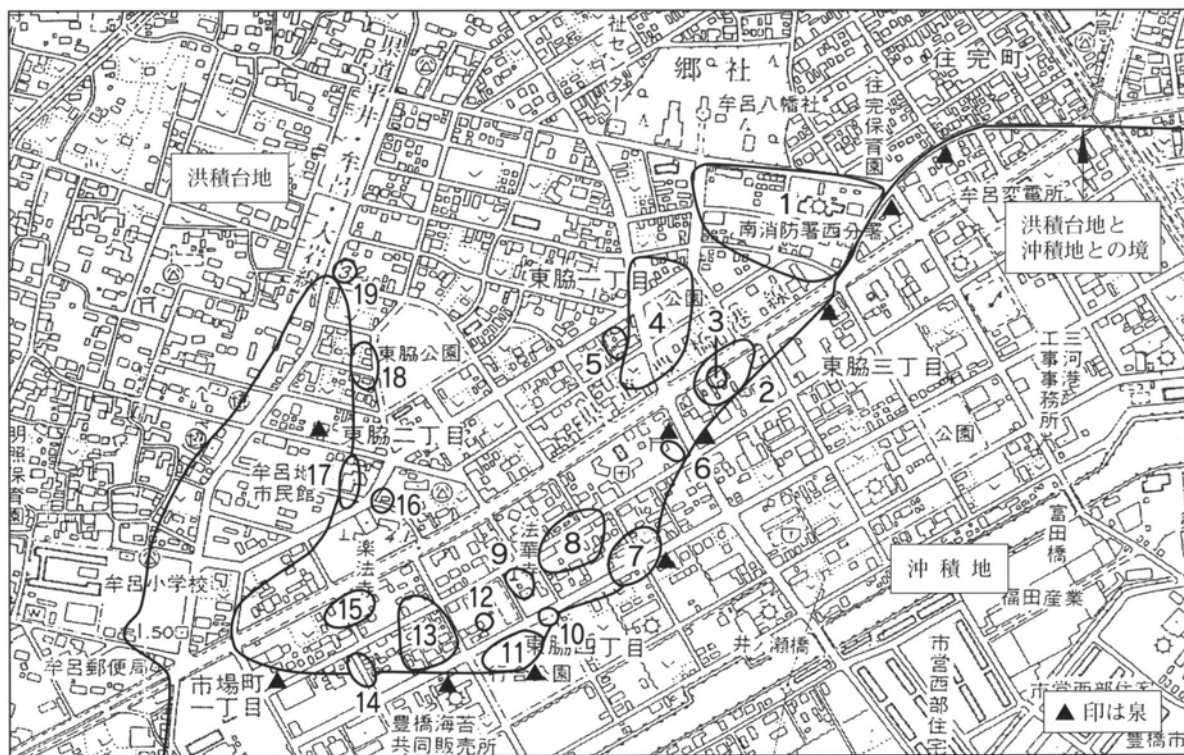


汐田校区の遺跡

(下図と番号が同じ)

番号	遺跡名	所在地	時期	遺構・遺物・備考
1	見丁塚遺跡群 (A~J)	東脇一丁目3~7	旧石器~江戸時代	方形周溝墓・住居址、石器・土器・須恵器・土師器 A遺跡 昭和43・44、E遺跡 昭和51、G遺跡 昭和62年調査
2	見丁塚貝塚	東脇三丁目15・22	縄文・鎌倉時代	土器・土師質土器、昭和37年調査
3	東脇古墳	東脇三丁目22	古墳時代	円墳、須恵器・土師器
4	林遺跡群 (A~G)	東脇一丁目9・10・21	縄文~鎌倉時代	住居址、須恵器・瓷器・行基焼・土師質土器 A遺跡 昭和54年調査
5	林貝塚	東脇二丁目20	江戸時代	土師質土器
6	高良社南貝塚	東脇四丁目1	鎌倉~室町時代	土師質土器
7	東脇貝塚群 (A~C)	東脇四丁目3・8・9	縄文~江戸時代	土器・土師器・須恵器・瓷器・行基焼・瀬戸美濃焼 A貝塚 昭和43年調査
8	東脇遺跡群 (A・B)	東脇四丁目9~11	弥生~江戸時代	住居址、土器・瓷器・瀬戸美濃焼 昭和43年調査
9	法華寺遺跡	東脇四丁目12	平安時代	瓷器
10	法華寺南遺跡	東脇四丁目12	平安時代	瓷器・行基焼、昭和43年調査
11	行合公園遺跡	東脇四丁目14	平安~室町時代	瓷器・行基焼
12	権現神社古墳	東脇四丁目13	古墳時代後期	円墳(一部現存)
13	行合貝塚群	東脇四丁目19・20	縄文晩期・古墳・平安時代	土器・須恵器・瓷器
14	行合遺跡	東脇四丁目20・21	縄文晩期・古墳~鎌倉時代	土器・須恵器・瓷器・行基焼
15	行合前遺跡	東脇四丁目19・22	縄文後・晩期・古墳~鎌倉時代	土器・須恵器・円筒埴輪・瓷器・行基焼、昭和58年調査
16	楽法寺東遺跡	東脇二丁目11	江戸時代	土師質土器
17	楽法寺貝塚	東脇二丁目8・13	江戸時代	土師質土器
18	東脇公園西遺跡	東脇二丁目1~3	鎌倉~室町時代	土師質土器
19	市道A貝塚	東脇一丁目35	江戸時代	

<遺跡名は旧字名を主に用いる。( )内は遺跡数>



汐田校区の遺跡分布図





汐田校区出土の主な遺物

見丁塚J遺跡、東脇A貝塚、法華寺西遺跡、行合遺跡、行合前遺跡、東脇古墳、権現神社古墳の11か所が知られ、弥生時代に比べて遺跡数が増える。

見丁塚F遺跡では、5世紀の中期の竪穴住居址1軒と7世紀の後期が3軒。北隣の見丁塚G遺跡（『見丁塚遺跡』）からは、後期の竪穴住居址8軒と掘建柱建物址1棟が検出されている。両遺跡は隣接しておりこの地域がひとつの集落であったと考えている。東脇A貝塚では4世紀の前期のS字口縁甕形土器、行

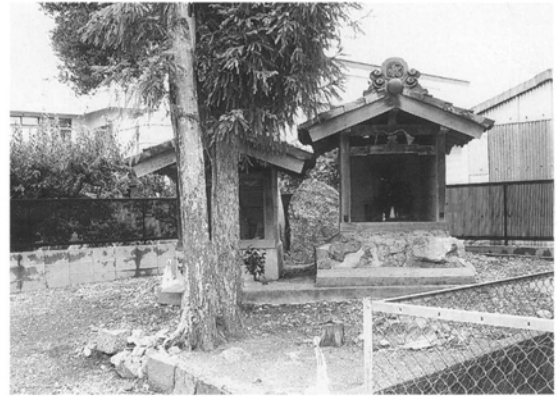
合前貝塚（『東脇遺跡群』）からは5世紀の中期であろうか埴輪片が数十点も出土し、この付近に古墳があった可能性が考えられる。

見丁塚にかつてあった東脇古墳は、古墳の上部に庚申様が祀られており、昭和33年（1958）から始まった柳生川沿線土地区画整理事業の道路工事により全て壊されてしまった。古墳の形は円墳で、直径12.6m、高さは推定2m。横穴式石室で、遺物は石室内から須恵器の平瓶と土師器の高坏脚部が出土している。年代は6世紀末から7世紀初頭頃と考





東脇古墳（点線内が古墳・北方から）



権現神社古墳（南西方から）

える。

権現神社古墳の旧字は行合<sup>ゆきあい</sup>である。昭和8年（1933）発行の『牟呂吉田村誌』（白井梅里）には「横穴円墳」と記されている。今は住宅地の中に高さ約60cm、8m四方をコンクリート壁で囲まれその一部が遺存している。古墳の上部には権現神社と庚申様<sup>こうしんさま</sup>が祀られ、この祠の裏手に横穴式石室に用いられたと考えられる立石が2個あり、祠の前には側壁らしい石組の一部が確認できる。遺物は明らかでない。年代は東脇古墳と同じく6世紀末から7世紀初頭頃と考えられる。

奈良時代になると、見丁塚A遺跡、見丁塚C遺跡、見丁塚F遺跡、見丁塚G遺跡、見丁塚H遺跡、見丁塚J遺跡、林A遺跡、林D遺跡、東脇A貝塚、法華寺西遺跡、権現神社遺跡、行合遺跡、行合前貝塚と13か所となり柳生川に沿って広く分布する。このうち見丁塚A遺跡からは、8世紀の竪穴状住居址2軒が検出され、東脇A貝塚からは、この地方では珍しい漢字で「陶」と<sup>へらが</sup>篋描きされた糸切り底の片<sup>かたつき</sup>が出土している。

平安時代は、見丁塚C遺跡、見丁塚D遺跡、見丁塚F遺跡、林A遺跡、林B遺跡、東脇A遺跡、法華寺遺跡、法華寺西遺跡、行合公園遺跡、行合遺跡、行合前貝塚の11か所が知られ、奈良時代の遺跡の分布と同じ広がりを見せる。法華寺西遺跡からは少量の遺物を伴い

住居址や溝状遺構が検出されている。

**中世・近世** 鎌倉時代から江戸時代にかけては、見丁塚C遺跡、見丁塚D遺跡、見丁塚F遺跡、八幡社前遺跡、林A遺跡、林B遺跡、林C遺跡、林貝塚、林公園遺跡、高良社南遺跡、東脇A貝塚、東脇B貝塚、東脇A遺跡、東脇公園西遺跡、楽法寺東遺跡、行合公園遺跡、権現神社遺跡、行合遺跡、行合前貝塚の19か所の最も多い遺跡を確認している。この時期になるとこれまでの東方の柳生川沿いの分布に加え、海が入江状に入り込んだ西方の田成周辺の台地縁端部にも、東脇公園西遺跡、楽法寺東遺跡が分布し、東脇地区全域に遺跡が広がることとなる。

昭和43年（1968）に発掘調査された東脇A貝塚（『東脇貝塚』）は、鎌倉時代から江戸時代にかけての貝塚であり、ハマグリやアサリが主体をなしている。遺物には行基焼・土師<sup>ぎょうきやき</sup>質土器・瀬戸美濃焼・土製品等が出土している。この貝塚は、この東脇地区および牟呂地区において考古学的な学術調査が初めて行われた遺跡である。

**まとめ** 汐田校区の遺跡は、旧石器時代から弥生時代にかけては柳生川沿いの台地縁端部に分布している。遺物の出土量は少なく、このなかで遺構に遺物が伴う遺跡は、弥生時代の見丁塚遺跡群・東脇B遺跡と古墳時代の東脇古墳の3か所である。古墳時代から奈良・



平安時代になるとほとんどの遺跡が、遺構に遺物と一緒に発見されるようになる。遺跡は台地縁端部と台地内部へも広がりを見せ遺跡数が増える。そして、鎌倉・室町時代から江戸時代になると、遺物のみの発見が多くなり、遺構はあまり見出されなくなるが、遺跡は台地内部へと広がりを見せる。

### (2) 牟留天神

『三河国内神明名帳』に「従五位上 牟留天神 坐 渥美郡」と載っている。このお宮は、牟呂八幡宮が鎌倉時代に勧請する以前のお宮ではないかといわれているが、はっきりしたことはわかっていない。

従五位上 西堂大明神	従五位上 楠本天神	従五位上 牟留天神	従五位上 石上天神	従五位上 出雲天神
坐 宝飯郡	坐 渥美郡	坐 渥美郡	坐 宝飯郡	坐 宝飯郡

三河国内神明名帳抄

### (3) 楠本天神

『三河国内神明名帳』牟留天神の後に「従五位上 楠本天神 坐 渥美郡」と載っている。このお宮は、慶長6年(1601)と元和6年(1620)の棟札が「楠之大明神」、正保3年(1646)「楠大明神」の棟札が高良社にあり、このお宮ではないだろうか。

## 2 中世

### (1) 牟呂八幡宮の勧請

『牟呂村八幡天王由緒記』によれば「文武天皇元年(697)8月鎮座し、貞応元年(1222)鎌倉八幡宮の境内を見習って正面

(南参道)と東・西の参道も作られた」と記録されている。しかし、鶴岡八幡宮から勧請したのは鎌倉時代初めの頃であったものと思われる。また、家光から受けた朱印状には、「牟呂八幡宮、牛頭天王両社領として4石5斗を与える…」と書かれている。ちなみに、祭神は品陀和気命(応神天皇)と息長帯姫命(神功皇后)で武門の守護神としてあがめられている。祭礼は、毎年4月第2土・日曜日。



牟呂八幡宮

### (2) 神事角力

八幡宮祭礼の神輿渡御の時に毎年、氏子総代、町総代で奉行、行司、力士(2人)が境内の鳥居のところと御旅所の林公園で2番ずつ角力をとる。四角の土俵場を作るため、まず奉行が北側から榊の棒で指し示して行司に榊の葉を交互に7枚置かせ、次に東へ5枚置き、次に西側へ回って3枚置いて土俵は完成。2力士を東西に向かい合わせ角力をさせる。

勝負は1勝1負にしており、御旅所でも同



神事角力



様にする。全国的にも珍しい行事である。

### (3) 宮座

牟呂八幡宮の宮座は、室町時代末期の頃からずっと今日まで続いている。この最も古い文書は慶長7年(1602)で、この時は牟呂の人たちだけでなく小浜の人も参加していた。



牟呂八幡宮宮座覚 慶長7年(1602)

宮座は、氏神に対する昔からの神社に縁故の家の人が祭礼を特権的に執り行う、その席を定めたもので神幸祭しんこうさいの中で行われ、明治になってこの制度は廃止された。しかし、牟呂八幡宮では氏子すべての人を対象に行うように変わって現在も続いている。

現在の宮座は、祢宜ねぎ、社守しゃもり、町総代、氏子総代など約60人が参加して行われる。

### (4) 神宮寺

牟呂八幡宮の境内に神宮寺があった。今では不思議に思う人が多いと思うが、江戸時代以前は神仏習合であったので、神社に神社のお世話をする僧があったり、仏像(掛仏)等があったりした。神宮寺の場所は、八幡宮の南の境内の末社市杵島社の西(グリーンハイツUM)あたりにあった。神宮寺は大きい神社に付随して、神社の境内か近くに建てられた。牟呂の神宮寺の建立と廃寺の時期はわかっていないが、明応元年(1492)の梵鐘ぼんしょうがあったこと、『三州吉田領神社仏閣記』(1691年)にその記録がないことから、この約200年間

のうちにできて消滅していたのではないだろうか。

その神宮寺があったことがわかるのは、現在八幡宮の鳥居内右側にある鼓楼ころう(昭和20年(1945)で、戦災で消失し、平成12年(2000)3月再建)が、その昔は鐘楼しょうろうで、この神宮寺から移築されたものである。



鼓楼

## 3 近世

### (1) 松島新田・富田新田の開拓

**松島新田** 新田開発は領主が年貢収入の増加につながるため盛んに開発を奨励した。そのひとつとして柳生川左岸に松島新田の開発が行われた。寛文7年(1667)家臣野部与次右衛門、堀惣助と馬見塚村豪農の孫平次の3人により開発された。面積は30町9反歩余(約31ha)で正徳4年(1714)の石高で東松島新田が100石8斗8升4合、西松島新田が185石7升4合となっている。元禄5年(1692)には善次郎に渡り、これが東松島新田、孫平次の分が西松島新田である。

**富田新田** 同じ柳生川左岸(柳生川に架かる富田橋の南)に開発された新田は、開発年次、開発者とも不明で、松島新田と同じか、その少し前の頃の開拓と思われる。なお、安政5年(1858)には家数は5軒であった。



(2) 柳生川

柳生川は、豊橋の東部丘陵から市内中央南部の池などから出る水を集め、市場橋から更に神野新田の先で渥美湾に注いでいる。山中川と殿田川の合流点から下流を柳生川といい、戦前の前田、福岡、牟呂の各地区は田園が多く、その間の川幅は狭く曲がりくねって流れていた。下流域の牟呂地区は海拔0mに近く、流れが緩やかで水深も浅く、梅雨時や台風時など水量の多い時はしばしば川があふれ、作物が収穫できないことがよくあった。



柳生川の工事【柳生川改修誌】

そこで、大正6年(1917)下流の牟呂地区の川を真直にし、堤防を3尺(約90cm)高くしたが、上流部が未改修のため氾濫の防止に効果は薄く、昭和6年(1931)5月に前田、福岡、牟呂の3地区の柳生川耕地整理組合連合会が組織され、耕地整理と河川改修によりJR鉄橋の下流から川も直線にし、川幅も15間(約27m)、水深も干潮時6尺(約1.8m)にして200t級の船の運航ができるようにし、両岸の土地を工業用地として利用することとした。昭和13年(1938)頃から柳生川左岸に①飼料、ユタカ産業、第一繊維、トミタ鉄工所(トミタ機械製作所)等の会社が進出して、燃料用の石炭や大豆、菜種等を積んだ船が入港し運河として使われるようになった。

しかし、繊維工場が衰退し最後まで残った①飼料の貯蔵施設も平成10年(1998)頃には

他へ移転したため貨物船の入港は途絶え、工場の跡地は大型のスーパーマーケットやマンションに変わった。

(3) 寺子屋

汐田校区内には3か所(下の表)の寺子屋があった。

寺子屋一覧

楽法寺	牟呂八幡宮		名称	
宣鈴嶽	光森尋田	権四郎	岡田	師匠
僧侶	神官	庄屋	農業	身分
習読	算習読	算習読		学科
嘉永期?	嘉永期	寛政期		時期業
五年治	五年治	六年治		廃業
23	30	10	男	筆子数
3	4	3	女	
1	1	1		教師数時
東脇	東脇	松島		所在地
月観音堂の裏に明治十九年正月、筆子が建てた墓がある。	建てた墓がある。	松島代々権四郎を名乗る。現在松島公民館敷地が邸宅の一部。		備考

貨幣経済、商品経済の発展に伴って、江戸時代の中頃から後期にかけて庶民の間で学問を身につけようとする動きがあり、知識のあ

る神官や僧侶等はこわれて寺子屋を開設するようになった。寺子屋は、数人から30人ぐらいの筆子ふでこをとって男子の就学率は高かった。この近辺での開設が早かったのは松島の岡田権四郎で、新政府による通知によって寺子屋の廃止になる明治6年まで約80年の間開かれ、読、習、算による基礎教育としつけ等の教えを行った。そして、数年間の師弟関係で強いきずなを結び師匠を親のように敬った。

#### (4) 神社・寺院

**高良社** 東脇町内の神社として東脇四丁目に鎮座している。祭神は武内宿禰たけのうちのすくね、倉稲魂命うがのみたまのみことである。



高良社

慶長6年(1601)11月の棟札があり、それによると「奉造宮楠之大明神…」となっている。延宝4年(1676)の棟札によると「広羅大明神…」となっている。弘化4年(1847)になって現在の「高良」の名前が出てくる。嘉永2年(1849)の棟札に「牟呂八幡宮撰社」と書かれており、このお宮は八幡宮との関係が深い。また、明治43年(1910)9月天白社を合祀する。祭礼は、毎年10月第2土・日曜日。

**松島社** 松島町内の神社として松島町に鎮座している。祭神は、罔象女命みずはのめのみこと、市杵島姫命いちきしまひめのみこと、火産靈命ほのむすびのみことである。

寛文7年(1667)松島新田ができるとすぐみずはのめのみこと罔象女命(水の神様)をお祀りしたのが松島



松島社

社で、明治2年(1869)火産靈命ほのむすびのみことを合祀した。

鳥居の内側に神代文字じんだいもじの灯籠がある。最も古い棟札は文政11年(1828)6月のものである。祭礼は、毎年10月第3土・日曜日。

**楽法寺** 東脇二丁目にあり、山号を五願山といい、元天台宗、鎌倉時代に臨済宗、龍拈寺末寺で、現在は曹洞宗である。



楽法寺

昭和20年(1945)6月の豊橋空襲で被災し本堂、庫裡を焼失した。戦災を免れた観音堂には寛政12年(1800)木喰五行上人83歳のときの作、本尊十一面観音が祀られている。また、この御堂の裏に寺子屋の師匠、鈴木宣嶽師の墓がある。

**法華寺** 東脇四丁目にあり、山号を法唱山といい、法華宗で、創立は文明10年(1478)に日蓮上人にっせんにより開かれた。

境内には、大正10年(1921)建設された船町出身の第16代行司木村庄之助の碑がある。



また、牟呂町公文にあった本登寺が廃寺になったことによる、鶴殿父・子の宝篋印塔ほうきやくいんとうが運ばれている。



法華寺

## 4 近代

### (1) 奥山新田の開拓

奥山新田は、松島町の南に位置する。このあたりは松王新田としてすでに（寛政2年（1790）開発された。安政2年（1855）の年貢免状によると石高18石6斗7升2合（年貢1石1斗4升8合）であったが、海に接していたため、明治初年頃までには、風波により汐が入って耕地は荒れて作物は皆無となっていた。

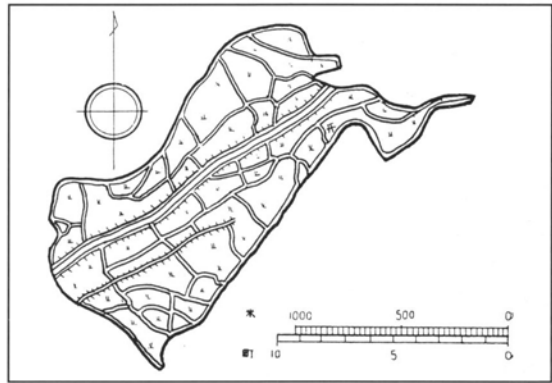
しかし、明治12年（1879）明治新田の干拓と一緒に奥山新田（約1町8反歩（約1.8ha））の干拓も行うことになり、翌13年頃には完成した。



奥山新田

### (2) 耕地整理

大正の初めには柳生川を挟んだ東脇の南部は田圃ぼんらんが続いていた。ここは排水が悪く、雨季には氾濫し、農作物の不作の年がしばしばあった。また、車馬が入れる農道も少なく、遠い距離を人の背によって肥料や稲を運ぶしかなかった。そこで、大正6年（1917）に牟呂耕地整理組合を設立し、堤防のかさ上げと、農道の設置、排水路の整備を行った。この面積は約106町歩（約106ha）であった。しかし、上流域の整備がされていないため大雨になると、下流域の東脇や松島の田圃たんぼへ流れてきてたまり、十分排水ができなかった。



耕地整理前の図『豊橋市整地事業誌』

そこで、県当局の仲介で昭和6年（1931）前田、福岡、牟呂の組合がひとつになり、柳生川耕地整理組合連合会がつくられた。柳生川を直線にし、川幅を広げ、川底を下げ、市場の締切を開放して排水の充実を図り、橋を



耕地整理後（現 東脇四丁目から東をのぞむ）杉浦一氏撮影

作り、船を運行させる大工事を行うことになり、昭和8年(1933)1月工事に着手し、同11年(1936)2月完成した。対象面積は、約206町歩(約206ha)である。

### (3) 東南海・三河地震

**東南海地震** 戦争が激しくなって来てボーイングB29爆撃機が高く飛来するようになると、一般市民は神経をとがらせていた。その頃の昭和19年(1944)12月7日午後1時36分、熊野灘沖を震源地とするマグニチュード8.0、震源の深さ0~30kmの地震が発生した。愛知、三重、静岡の各県の被害が多く、愛知県では、三河湾や伊勢湾沿岸の埋立地などに被害が集中した。

豊橋での被害は少なかったが、県内では、死者・負傷者が1000人以上、建物の被害は3万数千戸以上であった。当日の牟呂国民学校は午後休校となり、全校生徒は正午に帰っていて生徒に被害はなく、教室内の白壁に亀裂が入る程度であったが、神野新田の堤防は大きくゆれて沈下した所が多数あった。

**三河地震** 東南海地震の1か月後の昭和20年(1945)1月13日午前3時38分、渥美湾を震源地とする三河地震が起きた。マグニチュード7.1、震源の深さは地表近くで、宝飯・幡豆・碧海郡が主に被災し、その地方の家は倒壊が多かった。当地方も震源に近いので縦揺れであったが、家屋の倒壊はほとんどなかった。でも、柳生川沿いの道路は亀裂が走り、<sup>たんぼ</sup>田圃は液状化現象で刈り取った稲株の間に泥水を吹き上げた3~4cmの火山のような型の山があちこちにできた。

余震が続いて夜は家の中で寝ることができず、どこの家も庭に<sup>いなわら</sup>稲藁で3畳ほどの地震小屋を作り、約1か月間その中で家族寄り添って寝た。両地震とも当地方で火災がなかったのは幸いであった。

### (4) 豊橋空襲

昭和16年(1941)12月8日、日本のハワイ真珠湾攻撃によって開戦した、アジア太平洋戦争(戦争中は日本では大東亜戦争と公称)の終期に近い、昭和20年(1945)6月20日午前0時58分(6月19日午後11時43分頃という説あり)、米国陸軍第21爆撃機軍団の第58航空団の、ボーイングB29爆撃機が志摩半島方面から先導機12機が侵入して、爆撃が開始され、本隊の124機もその8分後に現れ、柳生川方面と太陽航空工業(現イトーヨーカドー)から火の手が上がった。

そして、豊橋市内は次から次へと焼夷弾<sup>しょういだん</sup>(長さ50cm、胴廻り25cm、目方1.3kgの細長い六角形の鉄筒に、油脂状の火薬を充填したものが油脂焼夷弾<sup>しょうめい</sup>である)が1万4889発、照明<sup>しょうめい</sup>弾12発が投下されたといわれている。



焼夷弾『戦中の市民生活と戦後の豊橋の歩み』

昭和19~20年(1944~45)頃豊橋市内には軍需工場が約64事業所もあった。現在の汐田校区内及び周辺にも、太陽航空工業(藤沢町)、日本蚕糸牟呂工場(牟呂町字松崎)、大日本兵器第三製作所(花田町牟呂街道)等があった。被災した神社は、牟呂八幡宮、<sup>すさのお</sup>素盞鳴社、小浜神明社(小浜町)等、寺院も楽法寺(東脇)、民家では松島の一部の数軒と<sup>ようまん</sup>養鰻組合の建物、その隣の倉庫が焼失した。

人々は、炎の中を牛川方面か牟呂方面へと



逃げまどい、牟呂用水の中へ飛び込んで火の粉を避けたり、牟呂八幡宮境内の松並木の下へ身を寄せ、恐怖におののき一夜を過ごした。



被災後の市内『豊橋市戦災復興誌』

この空襲で豊橋市街地は、ほとんど焦土と化して豊橋の死者624人、重軽傷者346人という悲惨なこととなった。

## 5 現代

### (1) 13号台風・伊勢湾台風

**13号台風** 昭和28年(1953)9月25日午後2時半頃、潮岬付近に上陸した台風は、毎時50kmで北東へ進み、午後6時半知多半島から、7時頃岡崎市付近を通過していった。この台風が伊勢湾を通過する時刻が、秋分の大潮の満潮時と一致するため、この日の午前10時半には、愛知県下に暴風雨高潮警報が発令された。この台風では海岸部を中心に高潮の被害が多く、特に台風の進行する右側は被害がひどく、吉前、神野(三郷・二回地区)、天津、渥美などの堤防が決壊し、収穫前の稲は海水のため収穫はできなかった。

二回地区の堤防の決壊は早く、25日午後7時頃海水が川を伝って浸入してまたたく間に増水した。

柳生川の堤防は、午後8時頃に各所で海水が溢れ出て浸水がはじまった。三郷地区の堤



13号台風の写真『神野新田開拓百年記念誌』

防の決壊は、25日午後9時頃に四号堤防の工事中の箇所できこり浸水した。

二回地区の人も、三郷地区の人も、堤防の決壊と同時に生活用品を持って急いで安全な学校、神社、寺院等へ避難し、一人の死者もなく退避できた。そして、多くの人の協力で堤防の決壊口の滞止めは終わり、約1か月(二回地区は約40日)で帰宅できることになった。その後、護岸工事を進め堤防をコンクリートで高く、厚く巻き、更に波返しも設けて鉄壁とした。

**伊勢湾台風** すでに、13号台風で決壊した堤防の護岸工事を終えていた。6年後の昭和34年(1959)9月26日夜半に、東海地方を襲った超大型の伊勢湾台風は暴風雨、高潮、高波が記録的で、県下各地は13号台風より被害は大きかったが、幸い完成していた堤防に護られて神野新田地区の被害は少なくてすんだ。

### (2) 柳生川沿線・柳生川南部

#### 土地区画整理事業

**柳生川沿線土地区画整理事業** 東脇は、牟呂台地の南の部分に家々が重なり合うようにして集落をつくっていた。その台地と沖積地に営まれた田畑の境を生活道路としての幅数メートルの狭い牟呂街道が東西に走っていた。しかし、戦後急速に車が増え、交通量の増加

に道路網の整備が追いつかず、昭和33年（1958）柳生川運河から北の東脇地区と羽根井の一部等を対象に、81haに及ぶ区画整理事業が開始され、昭和47年（1972）9月完成した。道路も公園も整備され田園だったところも住宅地に変わった。



1・3・3 豊橋港線の工事 中西三知雄氏撮影  
（現 東脇信号交差点付近を東から見る）

**柳生川南部土地区画整理事業** 「豊かで住みよい街づくり」をめざして、平成3年（1991）から事業の対象になる牟呂町字奥山新田、字古田、字東里、字百間、字松島、字南汐田の全部、牟呂町字大塚、字北汐田、字古幡焼、字中西、字松崎、字松島東、字松東と潮崎町、神野新田町字会所前、柱四番町、柱五番町、藤沢町、牟呂市場町の各一部の約69haの関係者に「あなたの町は、住みよい環境になっていますか」という調査を行った。

その調査をふまえ、準備委員会が平成6年（1994）10月26日に豊橋市長に対し区画整理早期実施を要望した。

平成14年（2002）9月19日組合設立が認可された。その事業の内容は、施行面積66.5ha、事業費178億円、地権者609人、事業完了は平成28年（2016）の見込みである。

平成14年（2002）10月6日に第1回総会（設立総会）が汐田小学校の体育館で行われた。

その後、仮換地の縦覧や個人説明会が行われ、現在「よりよい街づくり」をめざして事

業を推進している。



完成予想図

### （3）汐田校区の誕生

牟呂小学校の分離に向けて 昭和61年度になり、牟呂小学校は32学級の過大校となっていた。

牟呂小学校校区では、三郷地区で1戸建住宅が急増するとともに、東脇地区を中心とする一帯が区画整理事業を完了し、大規模な住宅地として大きく発展をしていった。

また、同時に豊橋市のドーナツ化現象が進み、個人住宅とともに、福田紡績工場跡地に大型のマンション建設計画があり、一層児童数の増加が見込まれる状態であった。



現在のマンション群

**牟呂小・中学校建設推進委員会結成** 昭和62年（1987）6月、地元の校区総代会を中心に牟呂区画整理審議委員、PTA代表、各町内



より選出した委員からなる牟呂小・中学校建設推進委員会と同小委員会を結成した。

その委員会が牟呂小学校分離問題に着手することとなった。

委員会では早速行動を起こした。7月には「牟呂小学校分離に関する陳情書」を作成し市長および議長に提出した。

この運動の結果、牟呂小学校を分離し、牟呂小学校を適正規模の小学校とするとともにこの地区に小学校を新設し、望ましい教育が推進できるようになった。



校区全景（南から見る）

また、長年の課題であった1小学校に1中学校という学区がこれにより、2小学校から1中学校へ進学という、新しい教育環境の整備にもつながり、地域では大きな期待を持って分離案が受け入れられた。

**学校敷地の確定** 新設校の建設用地選定には、過大規模校となった牟呂小学校を、24学級以下の適正規模とすることを条件として検討された。

将来的な児童数を推計していく過程で、牟呂小学校が今後も児童数が増大し続けることが明らかとなった。

当時の人口形態は、東脇地内が区画整理事業を完了し、宅地化が進んでいたうえ、運河南の区画整理の計画が出ている状態であった。

また、将来的には牟呂区画整理地区の人口

増、神野新田地内のミニ開発による人口増が見込まれ、再度の分離も視野に入れ候補地の検討が行われた。

しかし、区画整理事業の中で学校建設用地の確保など、長い将来を見越した計画がなかったため多くの苦労が伴った。

候補地は具体的に神野新田町、明治新田、汐田地区などがあがった。

これを受けて、小学校の基準面積を確保できるとともに、理想とする学校建設が可能な土地を確保できる最もよい条件が満たされる地区を選んだ。

**新学区の確定** 建設候補地が確定したのを受けて、新設小学校の学区（校区）の決定にはいった。

昭和63年（1988）6月、牟呂小・中学校建設推進委員会は、新設校問題の解決を市当局に白紙一任することとし、当案件について各町それぞれに臨時総会を開催して、新設校問題の市当局への白紙委任を討議し、それぞれの町で承認された。

しかし、学区の問題は複雑で、当初は県道1・3・3（豊橋港線）の南（東脇三・四丁目、西部住宅、南汐田、松島地区）の案、柳生川沿線区画整理地区全部の地域などの案を中心に検討にはいった。



開校記念日の学校

新設小学校の規模が18学級以上、分離する牟呂小学校が24学級以下とする条件を確保す

るため、神ノ輪町を含む案、市場を含む案などあらゆる状況を想定した。

また、児童数の推計は当時の0歳児から65歳までの人口を年齢別、地区別に集計し、2000年までの学級数の想定により基本案を策定した。

この中で、今までの町内を二つに割って、新設の学区を作ることに非常に強い抵抗を示す町民もあった。

新設小学校が母体である牟呂小学校に地理的に近いということが、校区の線引きに多くの障害となった。



校舎東通用門

多くの課題を解決しながら新設小学校の学区が現在の東脇、牟呂町（南汐田、北汐田、松島東、松島、松崎、中西、大塚、東里、古幡焼等）市場の一部と決定し校区が確定した。

#### （４）団地

汐田校区の中にはマンション等の大きな団地がある。その主なものは、

○市営住宅 西部団地（各5階建全510戸）

昭和53～56年（1978～1981）完成

牟呂町中西 12棟390戸

牟呂町東里 3棟120戸

○スペリア豊橋（14階建150戸）

平成8年（1996）8月完成

牟呂町古幡焼

○サンシティ・千代田（10階建119戸）

平成元年（1989）12月完成

牟呂町松崎 A棟59戸

平成3年（1991）1月完成

牟呂町松崎 B棟60戸



マンションと柳生川（西から見る）

○パストラルハイム豊橋

（壱番館15階建、弐番館14階建全232戸）

平成2年（1990）9月完成

牟呂町松崎 壱番館135戸

平成7年（1995）8月完成

牟呂町松崎 弐番館97戸

○シティガーデン（1戸建113戸）

平成6～16年（1994～2004）

牟呂町中西

## 6 産業

### （1）農業

終戦前（昭和20年（1945））までは、汐田校区のほとんどが柳生川を挟んで東脇の旧牟呂街道（往還）から南は小浜、福岡の下、西は市場橋、松島東、東は柳生橋近くまで田園が続いていた。面積は二回新田ほどで、広い水田を主に牟呂、東脇、羽根井、小浜、福岡の農家の人たちで耕作していた。

ここでは、稲作が主で畑は少なく、明治新田、青竹新田や屋敷近くの畑で野菜や麦、甘藷を作った。更に、下地や高師など遠くの田畑を借りて作物を作った。



また、養蚕農家では、牟呂八幡宮の裏から往完町へかけての畑で桑を栽培し、蚕を育てて繭をとった。

当時は、専業農家でも小作農が多く、米も1反(約10a)当たり5俵かそれ以下で金肥(化学肥料)も買えないので生産はあがらず、生活は苦しく、養豚、養鶏をし、野菜(西瓜、葱、里芋、白菜、大根など)等の小売りにリヤカーをひいて、羽根井や花田の町へ行って売り歩き、現金収入をはかった。



畑(東脇一丁目)

昭和33年(1958)からの柳生川沿線土地区画整理事業に伴い、多くの水田は姿を消し、埋め立てて一部畑として残るほかは住宅地に変わった。柳生川南も昭和50年(1975)頃から住宅地に変わりつつあり、水田は僅かに残るだけで、農業をする人はほとんどいなくなりました。

## (2) 漁業

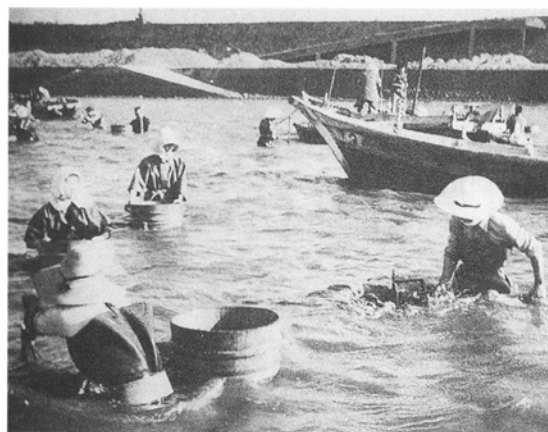
渥美湾東部に広がる六条潟漁場は、牟呂西側の海岸一帯で、海の恵は豊かで我々の先祖が太古から食料や生活費を得る場であった。

海では、あさり・蛤等の食用の貝やズキ・ボラ等の魚の他藻草・よらめ等肥料となる海草なども採取できた。特によらめは近海で大量に発生し、採取後はつぶして乾燥保存し、肥料として販売することができた。

明治34年(1901)漁業法の制定に伴い明治

36年(1903)牟呂漁業組合が設立された。設立当時の組合員は253人であった。

あさり この海はあさり・蛤の採取に最適であると共に種子あさりも豊富に繁殖する漁場であった。



あさり採り「六条潟と西浜の歴史」

特に戦中・戦後の食糧事情の悪い頃、あさりの需要が増え、採取時期になると組合員はかくわを使いあさりを採取し、貝付きあさり、むき身、佃煮用茹身等で販売した。

また、県下沿岸のあさり養殖の増加に伴い種子あさりの産地としても脚光を浴び、種子あさりの販売も盛んであった。

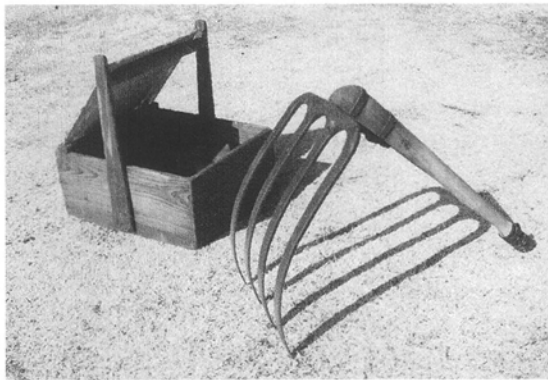
近年は、豊橋港の造成によりあさりの生息場所も激減し、採取する者もほとんどいなくなった。

釣り餌 豊川、梅田川、柳生川等の河口の干潟では、ごかい(ザー)・いそめ・ジャ虫・かに等魚釣りの餌となる生物が生息していた。昭和10年(1935)頃から松島町の人の一部であさり、海苔の採取のかたわら魚釣り用餌も採取している。

昭和30年代～50年代(1955～1984)の魚釣り人口の増加に伴い餌の需要が増え、豊橋市内の小売店はもとより、渥美、蒲郡、弁天島等の近隣地域。また、東京、名古屋、北陸等遠方の大消費地へも搬送していた。

昭和50年代後半から韓国等近隣アジア諸国

からの安価で、安定供給される輸入餌が徐々に増加し、平成の時代（1989～）になると小売店では輸入餌が主に販売されるようになった。地元産餌の需要が減少したこと、また、豊橋港の造成や水質環境等の変化により、餌の採取量が激減したため、現在では餌の採取を営むものは数軒となっている。



餌掘道具（備中鍬と餌入れ箱）

**海苔養殖** 六条潟漁場は、東三河地区が広島、東京湾と並ぶ日本三大海苔漁場に発展した漁場である。この海苔漁場の開発者は、安政4年（1857）牟呂村大西で生まれた芳賀保治である。

明治25年（1892）9月4日、毛利新田堤防が暴風雨により決壊し、翌春、芳賀保治は決壊場所を小舟で巡視中、現在の二十間川付近の枯れた葦に、海苔が付着しているのを見つけ六条潟にも海苔が生育することを知り、このことを牟呂村の人々に宣伝したが、人々は関心を持たず、養殖を試みる人はいなかった。そのため、彼は私費を投じて養殖試験研究を続けた。

明治29年（1896）には、有志約60名が豊川河口で大規模な試験をしたところ海苔が採れ、六条潟で海苔養殖ができる確信を得た。自信を深めた芳賀保治は、明治31年（1898）、六条潟漁場の共有者である牟呂、前芝はじめ8つの村をまとめて25万坪（約82.6ha）の海苔養殖場を豊川河口に設け、本格的な海苔養

殖を始めた。明治33年（1900）には、この地方で生産された海苔が「三河海苔」の名称で呼ばれるようになった。



海苔の採取『六条潟と西浜の歴史』

海苔の生産額は明治35年（1902）頃から毎年増加し、翌36年（1903）には牟呂漁業組合が設立され、海苔養殖事業が組合事業として運営されることになり、初年度生産額は二万余円（六条潟組合の合計値と思われる）との記録がある。

たゆみない販売等の努力や漁場の拡張及び養殖・製造技術の改善・発達により大正年間の生産量は急に増加した。この頃の愛知県下の生産量は東三河が過半数を占めており大正末期にはついに広島、東京湾と並んで全国第3位を占めるようになった。

太平洋戦争後半は、作業力や資材の入手困難等により一次的に生産量は減少したが、戦後は復旧した。昭和30年代（1955～64）には、



水平海苔網『六条潟と西浜の歴史』



海苔養殖技術の革命的4大開発（水平・糸状体による海苔の人口採苗・採苗網の冷蔵保管・浮き流し海苔養殖）による養殖技術の向上、各種生産機器（螺旋式海苔切断機・自動海苔すき機・海苔自動乾燥機）などの開発普及によって生産量は飛躍的に向上した。

昭和30年代後半（1960～64）は最盛期で、昭和38年（1963）漁協別共同販売出荷金額が約7億4900万円で日本一となった。しかし、同年に三河港造成計画が具体的になり、豊橋市、田原町、御津町等15漁協で三河港整備計画対策協議会を結成した。

その後、東三河工業整備特別地域の指定を受け昭和43年（1968）三河港造成に伴う漁業補償金を受け入れ、これを境に海苔生産者は次第に減少して、その後の三河港造成によりここでの海苔生産はできなくなった。

**うなぎ養殖（養鰻）** この地の養鰻は、奥村八三郎が明治初期に毛利新田一号堤防近くに池を造成し、天然うなぎに餌を与え成長させ、販売したことから始まった。

明治末期より大正初期にかけて、二回新田堤防寄りの未整備な低地区と富田川周辺の低地区に養鰻池が設けられた。製糸工場から出る蚕のさなぎ（ドッチ）がうなぎの飼料として利用され、地下水が豊富なことや東京・大阪の大消費地の中間に位置することなど好条件のもとに飛躍的に伸びた。



うなぎ養殖場「渥美郡史」

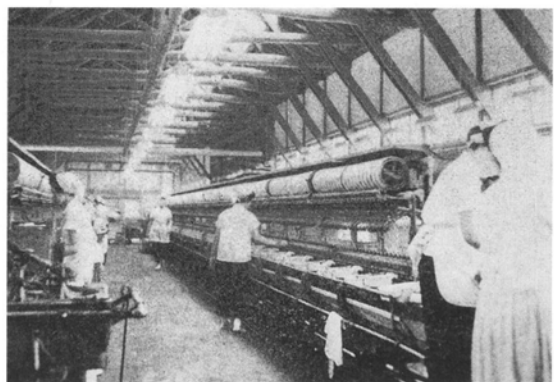
昭和10年（1935）餌のさなぎやいわしの確保と貯蔵を目的に、大手養鰻業者たちが豊橋養魚販売購買利用組合をつくり、事務所及び冷凍倉庫を柳生川の河口近くに建てた。その後昭和24年（1949）水産業協同組合法施行に伴い豊橋養鰻協同組合を設立した。

昭和38年（1963）頃からハウス加温による養鰻技術が実施され、従来の露地養殖池では出荷まで1年半かかるところを6か月で出荷が可能となり、うなぎの出荷量は急速に増加した。

しかし、海外から安価なうなぎが輸入され、地元養鰻業者は廃業・転業する者が増加し、現在汐田校区では養鰻を営む業者はいなくなった。

### （3）工業

柳生川沿岸の工場は、昭和8年（1933）柳生川耕地整理組合連合会によって柳生川改修が行われ、200t級の船舶が運航できるように水深を確保してからである。



新しい製糸工場『豊橋市戦災復興誌』

昭和12年（1937）頃から柳生川に貨物船の運行ができるようになり、原材料や燃料の運搬が容易になって、翌13年（1938）から順次、汐田橋から下流の富田橋あたりへ工場が移転して来て新しい工場地帯となった。①飼料を最初に、ユタカ産業、第一繊維、トミタ鉄工所（トミタ機械製作所）、坂神鉄工所等の工

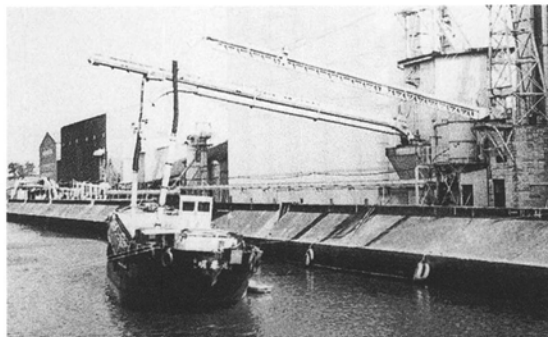
場が入り、貨物船の往来もはげしくなった。

また、牟呂八幡宮東大門西側の仲六酒造では「<sup>すいおう</sup>酔翁」という銘柄の清酒を醸造していた。



仲六酒造（昭和49年）

第二次世界大戦により、軍需景気となり工場は発展した。しかし、昭和20年（1945）の戦災により、工場は焼失し生産も停滞してしまった。



④飼料の搬入施設『福岡むかしと今』

昭和25年（1950）朝鮮戦争の特需により豊橋市内の工場も生産を増してきた。この頃、柳生川南のトミタ機械製作所（富国精機と変わり、後に坂神鉄工所と合併し豊橋精機に変更）の跡地を福田紡績が工場を設立し、綿製品の製造を始めた。しかし、昭和50年（1975）頃には営業をやめた。ユタカ産業、第一繊維も営業をやめ、最後まで営業をしていた④飼料の施設も平成10年（1998）頃には取り壊されて、マンションやスーパーマーケットに姿を変えた。また、西島鉄工所（豊橋工俱西島鐵工所）は、昭和32年（1957）牟呂町桶口下から、牟呂町行合（現東脇二丁目）に移転し、

発動機や自動車関連専用機械を製造していたが、昭和61年（1986）他に移転した。

今は、東脇には、自動車整備および自動車関連の工場や食品関係の工場等が点在している。松島には、食品加工の工場や自動車関連の工場がある。

#### （4）商業

明治から昭和20年代（1885～1954）にかけて東脇に1、2店の菓子や雑貨を商っている店や、かご屋・糺屋等もあった。この地の人々の生活は自給自足に近く、農業を主体に地味な生活をしていて、人口も特に増加するわけでもないで商店は増えず、特に必要なものは豊橋へ出た時や、隣の市場や中村等の町で買ったりしてすませている。



コンビニエンスストア（東脇一丁目）

しかし、昭和50年（1975）頃から、人々の生活が変わり、一般家庭でも週に1、2度は外食かスーパーマーケット又は、コンビニエンスストア等で弁当や寿司等を買って簡単にすませてしまうようになり、店は賑わいをみせている。これらの店は1・3・3（豊橋港線）沿いやその近くに店を開き客の多くは自動車利用の人である。

汐田校区の食品を主に売っているコンビニエンスストア等の店は4店舗で、昼時には賑わっている。薬局、おにぎり屋、寿司屋、酒屋、衣料品店、100円均一等の店も賑わいをみせている。



## 第3章 教育と文化

### 1 文化

#### (1) 校区の文化活動

**社会教育委員会** 平成2年度の校区独立と同時に、汐田校区社会教育委員会が設立された。組織は旧牟呂校区の組織を踏襲する形で、委員長は校区の総代会から選出され、委員は校区の諸団体の代表から選出される形を取った。

初代委員長は熊谷勝俊西部町総代がなった。以後、西部町総代が汐田校区社会教育委員会委員長を歴任していた。

社教の活動で重要な位置を占めている成人式については、汐田小学校の第1回卒業生が成人式を迎える平成10年度に第1回の成人式を行う。それまでは従来どおり牟呂中学校で、牟呂校区・汐田校区合同で実施することとした。



第1回 成人式

汐田校区の第1回成人式が平成11年(1999)1月15日の成人の日に、汐田小学校体育館で実施された。

汐田校区社教委員会が主催者として、初めての成人式であり、町総代、副総代など総代会の援助のもとに、各委員の協力を得ながら

新成人が出席して実施した。

平成14年度になり、校区総代会では校区社会教育委員会の組織について検討した。

豊橋市の社会教育委員会の活動が大きく広がること。校区社会教育委員会の活動にたいし、地域からの要望が多くなる中、次の二つの点が課題であった。

そのひとつが、総代会の業務が激務、多忙である中で、これ以上の社会教育活動への対応が困難であること。

他のひとつは、汐田校区の町総代の半分以上が1年任期という問題である。そのために、校区社会教育委員会の活動にしても、1年単位で、前年度の踏襲が中心となっていくことが多かった。

校区総代会としては、汐田校区の社会教育活動を充実するための委員会組織の在り方について、総代会長のもとに校区各種団体のひとつとして位置づけること、委員長、副委員長、女性部長は総代会で任命すること、任期は3年とし、以降の再任を妨げないこと、総代が社会教育委員を兼任しないこと、総代会との連携を図るため、各町では委員として副総代を選出すること。などの基本的な考え方を決定し、平成15年度から実施することとした。

平成15年度、新しい汐田校区社会教育委員会は、各町内より独立した委員として選出され新しい出発をし、コミュニティ活動推進や明るい選挙推進事業、施設見学会、成人式などに取り組んだ。

また、汐田校区市民館の運営の中心となっ

て、生きいき子育て推進事業につながる土曜日の事業を実施した。



音楽会

次年度の本格実施を前に、事業内容、講師の手配、運営の方法などを研究しながらの試行であった。

年末には、餅つき大会などの大きなイベントを行い、大勢の参加者に対応するための体験的行事を行った。

平成16年度は「生きいき子育て推進事業」が正式に市社会教育課に認定され実施した。  
**校区市民館活動** 校区市民館は平成2年(1990)4月、汐田小学校の開校と同時に体育館の階下に開館した。

当初の運営組織は館長に汐田校区社会教育委員長が、運営委員長に校区総代会長が就任し、校区各種団体長が運営委員として参画していた。



餅つき大会

開館と同時に多くの自主グループが汐田校区市民館に活動の場所を移し、また、新しいグループも結成されている。

平成14年度に校区社会教育委員会が改組されたのに伴い、校区市民館の運営組織も見直された。

市民館長に校区総代会長が、運営委員長に校区社会教育委員長がつき、運営委員は校区社会教育委員を中心に、校区文教、汐田小学校、汐田小学校PTA、子供会の各代表で構成されている。

市民館活動では、学校の休業土曜日に対応した活動がある。

平成12年度には、汐田小学校PTAが、愛知県の「家庭教育地域活動推進事業」の研究指定を受け、小学校のPTAが中心となり、校区市民館を活動の場所として、小学校児童を対象に、多くの講座を計画し実践した。



生きいき音楽会

また、平成15年度は「地域生きいき子育て推進事業」を始めた。校区市民館運営委員会としては、まず、実施校区として立候補せず、各種試行をする中で問題点を検討し、平成16年度から本格実施に踏み切った。

**汐田小学校区健全育成会** 平成2年度に汐田小学校の発足に併せて、汐田小学校区健全育成会の準備にはいった。

健全育成会の活動は牟呂小学校の活動を継続していくが、会則の作成、新組織の構成な



ど、1年をかけて検討し、平成3年度から新しい組織で出発した。

事業として、年度の初めに総会を行い、役員、事業計画、予算案の承認を受け、教育講演会、校区内危険箇所の点検、愛の一声運動、交通安全指導、あいさつ運動等、その時々状況に応じて活動を推進している。

**校区体育委員会** 平成2年度の汐田校区総代会が発足と同時に、校区体育委員会が組織された。体育委員会は、校区の体育関係行事の中枢として、体育委員長、体育指導員を中心に運営している。

事業の中心として校区体育祭がある。汐田校区民全員を対象に、4町対抗の各種競技を行っている。また、校区ソフトバレーボール大会も行っている。

対外的には、第9ブロックのインディアカ大会、ソフトボール大会、ソフトバレーボール大会、タスポニー大会など、各種大会に参加し、校区のスポーツ振興に寄与している。



クリスマス会

**子供会** 校区子供会の組織は、汐田校区の東脇、松島、西部の三町のそれぞれの子供会の活動で成り立っている。各町の子供会の運営委員は、汐田小学校の児童保護者から選出された委員により、組織されている。

それぞれの町では、独自の子供会活動を実施している。

豊橋市子供会連絡協議会（市子連）に所属

し、校区を代表して中央大会へ出場する場合は、校区の大会を行い代表を派遣している。

中でも球技大会ではブロック大会を勝ち抜き、中央大会でも活躍した。



球技大会優勝

また、赤い羽根共同募金にも参加している。

校区の活動としては、球技大会、餅つき大会、校区子供会等を実施して、地域の子供の健全育成に寄与している。

**校区老人クラブ** 汐田校区の老人会は、汐田校区が牟呂校区から独立した平成2年に、当分の間、牟呂・汐田老人会として一体的に運営するとして、汐田校区老人会としての独立した活動組織は作らなかった。



老人会旅行

現在でも、汐田校区の老人会では、汐田校区としての活動はせず、各町内会の老人会組織＝例：福寿会（東脇老人会）＝がそれぞれに各種の日常活動を行っている。

牟呂・汐田校区老人会は、連合して旅行を



芸能大会

計画したり、定例のカラオケ大会を催し、連携を深めている。

## (2) 学校教育

汐田小学校開校準備に向けて 平成元年(1989)になり、教育委員会では開校事務取り扱い者を中心に、新設小学校発足への動きが急速に進んだ。

1月には、新設小学校の学校名の公募が行われ、980件にも及ぶ校名の応募があった。

その中から新設校の所在地の地名で、牟呂地区の小学校らしく、海に近く、汐の香りがする、自然に恵まれた、校区を象徴する校名として、「豊橋市立汐田小学校」と決定した。



校旗

3月議会には、学校設置条例案が上程され可決、承認を得た。あわせて、汐田小学校の学区決定に伴う、通学区域を決める教育委員会告示の改正案も示された。

6月には、校章の作成委員会も設立され、波と飛び立つ鳥をイメージに「汐」という字をデザインしたもので、力強く、未来に羽ばたく子に成長してほしいという願いを込めた。また「汐」の「シ」は校区である東脇、松島、西部の各地区がひとつにまとまることをイメージし、シンプルで新しさを感じさせるデザインとなった。

汐田小学校開校準備委員会の結成 一方、新設される汐田小学校区では、平成元年(1989)5月、校区の代表者からなる豊橋市立汐田小学校開校準備委員会が発足した。



元浜橋の歩道

会長に東脇町総代の鈴木明、副会長に松島町総代の石黒清隆と西部町総代の杉田元司を選出し、委員35名と、顧問5名、相談役4名、参与2名が、ともに承認された。同時に開校準備小委員会の委員も承認され活発な活動が行われた。

特に地域の児童にとって大切である、安全な通学路の確保に向けて「汐田小学校通学路にかかわる諸問題についての要望書」をまとめ、提出した。

要望書の中心は、道路が整備されていない県道1・3・3(豊橋港線)から柳生運河に架かる元浜橋までの間で、

- ・県道1・3・3(豊橋港線)の横断歩道橋
- ・県道1・3・3(豊橋港線)から元浜橋までの歩道

- ・元浜橋の歩道併設
  - ・駐車禁止区域の設定と住民への依頼
  - ・行合公園の下枝の撤去
- などの内容が中心であった。



横断歩道橋

**汐田小学校PTA設立準備委員会の発足** 平成元年（1989）11月29日、学校を支えるもうひとつの組織であるPTAの設立に向けて、汐田小学校PTA設立準備委員会が設立された。

特に新設校の先輩である二川南小学校から多くの参考資料を受け、会則等、組織のもととなる規則を制定した。

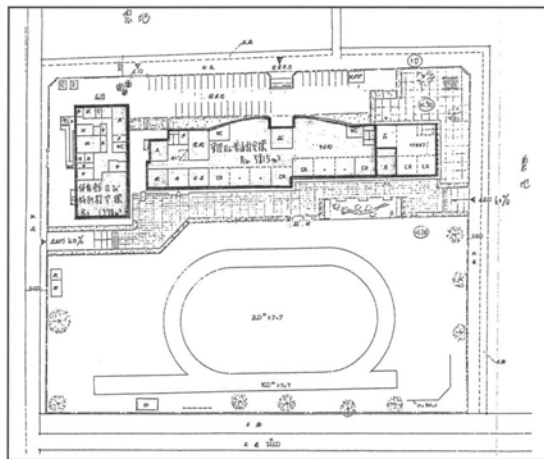
平成2年（1990）1月には、新生汐田小学校PTA役員を選出し、設立総会を経て、総会への準備にはいった。

**汐田小学校の建設** 新設小学校が学校用地の条件としては最高であったことから、PTA



校舎全景

設立準備委員会や地域の皆様の意見を広く聞き、次のような建設の基本方針が決められた。



校舎平面図

- \* 学校は当初は16学級程度でスタートするが、将来は児童数の増加が予想されるので、途中で増築することがないように、最初から各学年4学級の同一フロアの集合とし、全校6学年が2学年毎にフロアを形成する理想的な配置ができる学校として設計する。



オープンスペース

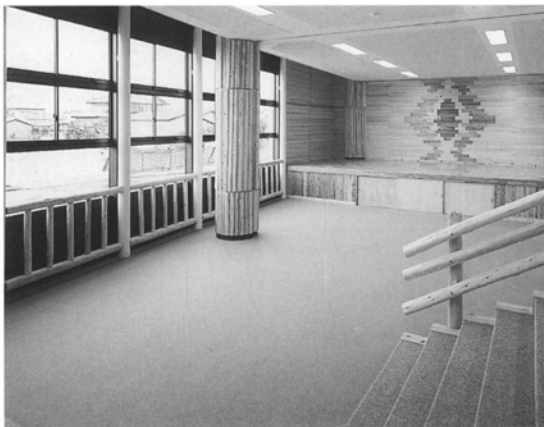
- \* 新設小学校は地域の象徴となるように、児童が自慢する学校としたい。
- \* 当時の文部省で日本一という評判の、学校建築の最先端を行く横浜市本町小学校をモデルに設計した。





校舎内部

- \* 文部省の最新の教育環境条件である多目的スペースの最大限の導入をはかった。これは、当時の設計で理想とされた壁を取り外すと、オープンスペースと一体となって、8教室分のフロアを持つ教室となり、必要に応じてひとつの学年（4学級）が一斉授業をできるように設計した。
- \* 温かい教育環境とするために、奥三河林業組合の協力を得て、図工室・音楽室・多目的スペースなどに間伐材の積極的活用をはかる。



多目的スペース

- \* 児童用トイレを明るく清潔なものとし、女子用の数を多くする。
- \* 生活科のカリキュラムに対応した第2理科室の設置。
- \* 新しく導入される情報教育やコンピュー

タに対応できるように、理科室・家庭科室・視聴覚室をLAN対応（コンピュータネットワーク）の教室として整備する。

- \* 校区に開かれた学校を目指し、音楽室・家庭科室を管理棟から外し、校区市民館と併設して、日常の社会教育活動から、災害時の緊急対応まで、多目的に利用ができるように設計する。

新設小学校の基本設計は、既存の学校建築の概念を取り外し、教育関係者が描く理想とする教室環境や、児童や教師の夢が実現できる学校を目指して設計することとした。

これらの設計思想により建設された新設小学校は、当時の文部省の評価で、多目的スペースのモデル小学校、木の利用施設のモデル小学校として、1991年の全国ベスト20小学校に選定された。

豊橋市としても自慢の小学校が建設でき、合わせて、新小学校の建設に向けて精力的に活動した人達はもちろん、校区の設定に対して反対した地域の人々にとっても、期待に添うことができた小学校が建設された。

### （3）汐田小学校のあゆみ

（ア）開校式 平成2年（1990）4月4日、豊橋市内51番目の小学校として、校区民全員が待ち望んだ豊橋市立汐田小学校の開校式が華やかに開催された。

開校式には豊橋市を代表して高橋アキラ市長はじめ豊橋市、教育委員会、議会関係者などが、校区からは山本元汐田校区初代総代会長をはじめ各町総代、町役員、各種団体長、汐田小学校PTA会長はじめPTA役員、会員など多くの来賓と地元代表者が参列した。

テープカットでは市長を中心にして児童代表が加わり、新しい学校への第一歩を印した。

開校式典は体育館で行われ、市長が開校宣言をした後、校章が描かれた真新しい校旗が



テープカット

学校長に授与された。

校長は「環境は整った。これからは地域の人達と手を携えて、よりよい教育を目指したい」とあいさつ。児童たちは、代表に合わせて「新しい歴史を築き上げていくことを誓います」と誓いの言葉を唱和した。

その後、校舎内が自由に見学できる時間が持たれた。玄関や吹き抜けには、「生まれいずる生命」や「夢限りなく」という名の巨大なレリーフが、ここで生活する児童たちに、たくましく、力強く成長してほしいというメッセージを伝えているように感じた。

各学年ごとに設けられた多目的スペースは、教室の面積をはるかに越える広い空間となり、木の香り豊かな木壁とあいまって、ゆったりとした学習環境をつくりだしていた。



音楽室

体育館の下には校区市民館と音楽室、家庭科室が併設された。これにより、校区市民館の主催事業や地域の教育活動に音楽室、家庭科室が活用しやすくなっている。

新しい教科である生活科に対応した低学年理科室や循環式流水観察池など、学習の多様化、効率化にも対応できる配慮がなされ、児童一人ひとりの個性・能力の伸長と地域とともにあるこれからの学校教育が提案されたように思う。

(イ) 汐田小学校の始まり 平成2年度の汐田小学校が始まった。初年度は16学級、児童数581人、教職員数は25人の規模である。

教育目標は『よく学び よく遊べ』とし、具体目標を校名の『しおた』を頭に、

- ・しんけんに学ぶ子
- ・おもいやりのある子
- ・たくましい子

と決定した。

斬新なデザインの校舎建築を受けて、現職教育の大きなテーマとして、新しい教育の在り方を研究する組織—オープンスペース研究委員会—を設置した。

5月10日には第1回の研究委員会を開き、その後継続的に会合を開き、学校教育目標の具現化をめざし、恵まれた学校施設を効果的に活用する教育活動のあり方を研究した。

特色ある教育計画では、学校行事の「汐田フェスティバル」がある。

12月に入り、教務主任を中心とする構想委員会で、この行事の基本理念を児童が創造的に考え活動することを通して、自主的、実践的な児童を育成する柱のひとつとして実践することが確認された。

第1回は児童会を中心にして、通学団ごとに、親子で昼食を取りながら、午前、午後の各種の活動を実施した。新しい学校の教育の在り方を児童、教師、父兄が一緒になって、

活動を通して体験した1日であった。

週計画では「汐田タイム」を設定した。

1時間目の授業前20分を取り、学年・学級の時間、全校集会、児童集会などができる時間を設定した。



書き初め集会

汐田タイムを活用して1月10日、全校書き初め集会が行われた。4年生は広いオープンスペースをフルに活用して、クラス全員の寄せ書きに挑戦。大きな紙をクラス全員で囲み、一人ひとりが力強く寄せ書きした。

(ウ) 校歌の制定 汐田小学校にとって学校の顔である校歌が制定され平成3年(1991)3月6日に発表会があった。

<p>豊橋市立汐田小学校校歌</p> <p>夢の ここに はばたいて</p> <p>作詞 平野 祐香里 作曲 加賀 清孝</p>	<p>一 今 駆けてゆく心 汐田の太陽 ほくたち わたしたち わかりのするよな 心 大きく 空をめざして、まっすぐに 汐田の太陽 ここに 照りなく</p> <p>二 今 生まれ来る夢よ 汐田の未来 ほくたち わたしたち 汐田の響りのするよな 夢よ 跳立て 夢に飛び立つ 白い鳥 汐田の未来 夢よ 広がれ ここに はばたいて</p> <p>三 今 燃えあがる生命 汐田の勇気 ほくたち わたしたち 生命の光のさすよな 生命 抱きしめ 力限りに生きてゆく 生命 輝け 生命 輝け 汐田の勇気 ここに 燃えあがれ</p>
--	---

校 歌

新しい学校にふさわしく、新進の女流作詞家として活躍している広島県瀬戸田町教育委員会職員、平野祐香里が作詞。本来はオペラ

歌手であるが、小中学生のための合唱曲や、歌曲の作曲にも携わっている声楽家で二期会会員の加賀清孝が作曲。

新しい学校、新しい子供たちにふさわしい校歌「夢 ここに はばたいて」が制定された。

多くの学校の校歌が伝統的な歌詞やリズムであるのとは対比的に、明るくリズムカルで力強い、新しい感性で作られた詩とメロディーは子供たちの自慢の校歌である。

新設の学校ということで、多くの補足的な工事や、記念植樹が行われた。

- ・生活科ゾーンに教材園の新設
- ・正面玄関横に学校案内掲示板の設置
- ・視聴覚教室に暗幕の取り付け
- ・鳥の飼育小屋の構造改革工事
- ・開校記念植樹(やまもも)
- ・緑化推進事業記念植樹(さざんか等)

加えて、体育館の緞帳、鼓笛隊用具一式が校区の篤志家から寄付された。

斬新な学校建築が話題となり、県外から那覇市教育委員会、横浜市立小・中学校校長会、甲府市教育委員会などを含め、多くの視察があり、この1年で63件、1257名に達した。

(エ) 汐田小学校の歩み 平成3年度、開校2年目を迎え、地域も学校も落ち着き新しい歴史を刻み始めた。



汐田フェスティバル



「汐田タイム」「汐田フェスティバル」はこれらの時間、行事を通して児童の自発的、自治的活動を促し、創意工夫を生かす集団の組織的活動の中で、自主的実践的態度を身につけることを目標とした初志が受け継がれた。

汐田タイムでは「羽ばたけ集会」「バースデイ集会」「音楽集会」や科学委員会が主宰する集会など、十分に目的を達成した活動として定着していった。

汐田フェスティバルの企画・運営は児童一人ひとりが創造的、自主的に取り組むことをめざしている。

中・高学年の各学級では、低学年の児童を自分の学級に招待し、彼等がこの行事を通して、楽しい時間を過ごし、少しでも早く学校生活に慣れ、豊かにすることができるように出し物を工夫している。

これらの活動は、形や内容はその時代を反映して変化しても、中心にある考え方は、現在までも受け継がれている。

経営方針のひとつである家庭・地域との連携に向けて、各学年ごとに「親子ふれあい教室」を実施した。この行事も以降の学校行事として定着していった。

この年も多くの記念植樹が行われた。

- ・緑化推進事業記念植樹（くすのき）
- ・環境の木「緑親」記念植樹（くすのき）
- ・話し方大会記念植樹（シイなど）
- ・卒業記念植樹（スダジイ） など

また、卒業記念制作の校歌パネルが体育館に設置された。

横浜市鶴見区校長会の21名をはじめ、年間23件、昨年度に続き、多くの学校参観者が来校した。

平成4年度、新設校としての活力を生かして3テーマの研究委嘱があった。

「校区家庭教育学級推進事業の推進」

「地域社会との連携を強化しよう」

「豊かな心を育てる活動推進事業」

これらは本校の運営の基本方針とも一致し積極的に研究に取り組んだ。

9月には学校週5日制の先駆けとして、第2土曜日が休日となった。それに伴い、校区市民館が児童の土曜日の活動場所として午前中も開館されるようになった。



親子活動

11月18日、PTAを中心に星空を見る会が企画された。本校教諭が講師となり5・6年生を対象に参加希望者を募った。

PTA会員の有志が中心となって、運動場に天体望遠鏡を設置し、肉眼による天体観測と合わせて、惑星の望遠鏡観察が行われた。

この企画は好評で、以後学校行事として定着している。

学校事務にも情報化の波が打ち寄せ、事務用コンピュータが本庁のホストコンピュータに接続されるための工事が行われた。

これ以後、学校と市教育委員会とが、コンピュータで接続され情報交換・処理がコンピュータで行われる時代へと入っていった。

新しい施設として、運動場に日時計が1基設置された。長い昼休みや、下校時間を自主的に守る児童の育成に役立った。

今年度の学校参観者は、北設楽郡校務主任者会の9名をはじめ、13件であった。

平成5年度になり「豊かな心を育てる活動

推進事業」の研究2年目を迎え、研究発表に向けて深化・整理の段階へはいった。併せて地域少年少女サークル活動開発事業」の研究委嘱も受け、充実した現職研究が進んだ。



田 植 え

平成6年度、学校保健歯科優良校の表彰を受けた。これを機会に学校を挙げて健康教育への取り組みが始まった。

平成7年度は、現職研究の研究課題を「心豊かで、たくましく生きる子どもの育成をめざして～心と体を鍛える健康教育推進～」として、全校を挙げて研究に取り組み多くの実践をした。

その結果、平成7年度には、学校保健歯科医師会賞と健康推進活動（県大規模校の部）特選校表彰を受けた。

平成8年度は、健康教育推進活動の2年目となり、性教育推進の県の研究委嘱を受け、研究推進のテーマに性教育を加えて、研究実践を重ねた。

研究の成果は、県性教育セミナーにおける発表や、愛知県健康教育推進連盟の大会において「健康推進活動」として発表され、好評を受けた。

これらの研究実践に対し、県学校保健研究大会において、大規模校の部の優秀校として表彰された。

青少年赤十字に学校単位で登録し、結団式が行われた。これに伴って、各種の募金活動

が、児童会を中心に行われるようになった。



健康教育パネル

平成9年度は、健康推進活動の3年目を迎えた。今年度も前年度に続き、性教育の研究実践が重点的に進められた。研究の過程でFMとよはしから、性教育の5年生の授業実践の取材を受け、電波に乗った。また、性教育研究セミナーがライフポート豊橋で行われ、代表して本校が発表を行った。

健康推進活動の長年の取り組みと実績に対し、特別優秀校として愛知県健康教育推進連盟から表彰された。

平成10年度は、韓国晋州市児童との交流会や県立豊橋聾学校との交流会を行った。国際理解教育や障害者に対する理解を深める教育の一環として、成果があった。県立聾学校との交流は、当年度以降継続している。

平成11年度は、学校創立10周年記念に当たり、記念事業が計画された。



南通市児童交流会

記念事業として記念式典、モザイク壁画の製作、記念誌『つなげよう未来へ』の作成が行われた。

モザイク壁画は2階階段の壁面(職員室前)に展示されている。

また、中国南通市の教育委員が学校視察に訪れ、斬新な校舎建築を見学していった。その後、南通市の小学校の陳校長らも、新しい施設での教育の現場を視察していった。

P T Aが家庭教育地域活動推進事業の県の研究委嘱を受けた。

研究は汐田小学校P T Aが中心となって、休業日となった土曜日に、校区市民館で各種の講座を計画し、子供たちに活動の場を提供した。

平成13年度は、コンピュータ室に学習用コンピュータが40台設置された。これにより、中学校の情報処理教育に合わせ、コンピュータに関する学習や、各種の学習ソフトの活用を中心とした情報処理教育が充実した。



コンピュータ室

バスケットボール男子が汐田小ブロック大会で優勝。金管バンド愛知県管楽器交歓演奏会で優秀賞を受賞した。また、青少年赤十字より募金を中心にした赤十字活動に対し感謝状を受けた。

先年に続いて、南通市人民対外友好協会が来校し、児童作品などの交換が行われた。

平成14年度は、愛知県教育委員会が募集す

る「夢が語り合える学校づくり推進事業」に応募し、実践校に決定した。

この事業は、学校が児童にとって魅力に富み、将来の夢が語り合える様な活力のある場となるよう、地域や児童の特色を生かした地域に誇れる学校づくりを支援し、一層の活性化を図るものである。



流水観察池全景

本校では『「創造的な活動の場」 「ふれあいひろば」で自然と遊ぼう。』をテーマに、流水観察池周辺を、子供たちにとって魅力ある場所に一新することとし、P T Aを中心に地域の人材を活用して木製のベンチ・テーブル作製、パーゴラ、自然観察案内板の設置をした。

平成15年度は前年度の事業の継続として、「ふれあいひろば」に手押しポンプ井戸を設置した。自分の力で汲み上げた水の冷たさに子供たちの歓声が上がった。

日本赤十字社から、児童会が中心となって取り組んだ海外救援活動に対し感謝状を受ける。

平成16年度学校保健委員会では、『「がんばるぞ! 8020運動」一歯や歯ぐきを大切にしよう。』をテーマに、全校で歯の健康維持に取り組んだ。

市内水泳競技中地区大会で男女とも優勝の栄冠を得た。



## 第4章 民俗

### 1 役行者えんのおぶね

お寺の門前やお宮の境内に、二本歯の高下駄を履き、右手に杖を左手に巻物を持って腰を掛け、あごひげをつけた1mほどの石像がある。これが役行者である。



高良社境内の役行者

これは、鎌倉時代（1192～1333）以前に高まった役行者崇拜による民間信仰の表れで、近世になると全国に広まって行った。東脇四丁目の高良社には役行者の石像がある。

この地区では、大峰山の信仰により登山に出発する前に、役行者の像の前で安全祈願をし、無事帰還をした時には御礼参りをした。

野依町や雲谷町では、昔は毎年1月に大峰山参詣の先達や村人が、法印（山伏）を招いて護摩を焚きお祀りをした。

役行者の本名は役小角えんのおぶねといい、山岳宗教の修験道の祖とし、大和葛城山かつらぎ（奈良県北葛城郡と、大阪府南河内郡の境）で修行した人で、神通力を持って鬼神を従わせ、悪霊を封じ込めるほどの能力を持っていた。そして苦難に沈む庶民じゅほうを呪法で積極的に救い、現世利益りやくの

求めに応じようとつとめた人である。

### 2 荒神こうじん

昔から住んでいる東脇や松島地区の人の中には、今でも「お荒神様」をお祀りしている家がある。この神様は、田の神、山の神、役行者と同様に庶民へのかかわりが深く、庶民信仰の対象になっている神様である。

全国的には三宝荒神で「竈神かまどがみ」と言われているが、これは関西に多い。また、別には荒神として地神ちのかみ、地主神ちしゅ、山ノ神をお祀りしている地方（中国・四国・九州）もある。更には一族の氏神としての性格を持ったりしている所（関西地方）もある。



お荒神様

この地方では、おもに土地の神様（屋敷神）の性格が強い。

お祀りしてある場所は、一般に屋敷の北、又は北西の隅である。

昔は、藁わらと竹の家で作ってあったので毎年建て替え、地所も綺麗な砂と野芝で、幅は約30cm四方、高さは10～20cmに積んでここを聖

地として物を置かないようにしている。そこへお社（藁で屋根を葺き女竹で柱を作った）を新築している。

しかし、今は瓦のお社かコンクリートの半永久のお社である。

祭礼は11月15日で、お社の中へ半紙を敷きその中へ小豆の入ったご飯を供えて、家の無事を祈った。

また、家によっては毎朝お茶と線香をあげたり、毎月1日・15日に神酒と榊をあげたりしている。

また、毎年決まって、この日の午後からにわか、強い北風が吹き出し寒くなった。

荒神は、文字どおり激しい気性の神様でたたられないように、ささわらないようにお祀りをしていたようである。

三河地方では、民間信仰としての「お荒神様」を畏敬の念をもって永く伝統を守って来ているが、戦後はこの風習もすたれいつか消えそうである。

### 3 草相撲

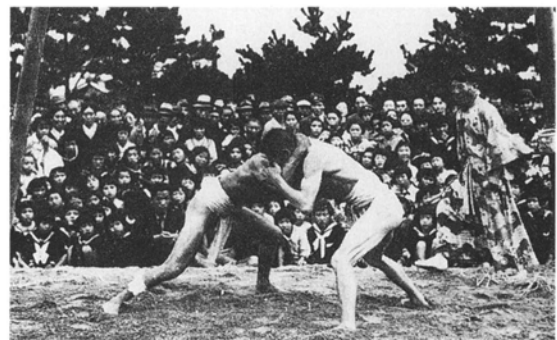
明治末期から昭和の初め（1900～1940）にかけて、娯楽の少なかった牟呂吉田の村々に若い男子が、心身を鍛えるために相撲による鍛錬を行った。

相撲場は集会所（公民館）やお宮の境内にあって手軽に練習ができたし、相撲の好きな先輩も多くいた。農業、漁業で鍛えた体格の優れた青年達が、もてあますエネルギーを出しきる場所として、相撲は最も良いスポーツであった。また、この相撲を応援するファンも多く、老人から、子供、娘までであった。

この相撲の組織は、東三八幡講相撲協会です。牟呂力士連はそれに加入していた。

各地区のグループは、牟呂のほか豊橋、前芝、二川、御津、三谷など13あり各グループ

の代表には頭取（親方）があり、しっかりした組織の中で運営されていた。力士も各地の氏神様の祭礼や、地鎮祭、完工式、記念祭、祝賀行事、追善供養、襲名披露、引退披露等に参加し、力自慢を披露して、御鬘筋からの賞品や賞金を受け取った。それらは親方が一括して受け取り、その日のうちに参加した全員に山分けされる。



祭礼の相撲「ふるさと大崎」

親方は、行事参加の依頼を受けると力士たちに参加を呼びかけ、力士は依頼を受けると、仕事も投げ捨てて参加した。この時代力士は相撲を花形スポーツと考え、常にプライドを持って生活しており何をおいても参加した。

#### 相撲

大正二年九月五日 公文にて角力あり、二回出ず。  
 # 九月七日 市場に角力あり。  
 四年四月五日 村尚武会招魂祭あり、角力及び投擲あり。  
 九年九月五日 本日より三日間豊橋に東京の横綱嵐及び大坂合併の大相撲あり。  
 十年十月三日 本日中村に角力あり、晩より見物す。  
 # 十月五日 三ツ相に角力あり。  
 十年九月五日 公文に日ノ出山の追善角力あり。  
 # 十月三日 市場に角力あり。  
 吉田十月十日 三ツ相、三ヶ濱角力弓納あり。  
 昭和二年十月三日 馬見塚の花天林俊志の廻披露角力あり。  
 # 十月六日 市場の若嵐形瀬文吉角力会懸退角力あり。  
 晩方出陣。  
 # 七月七日 前芝に角力あり、晩方出陣す。  
 五年七月五日 吉田方学校で渡津橋渡橋式の余興として東三選手角力あり。

【土倉市平日記】より抜粋

松島の中には力持ちが多く、宝岩（鈴木林次）、2代目宝岩（鈴木竹一）、鬼若（味岡吉藏）、松ヶ島（味岡広太郎）、若嵐（味岡登）等の人々が中心になっていた。特に大正の始め（1912～20年頃）は宝岩林次が、昭和31年（1956）から5年間と43年から60年（1968～1985）まで

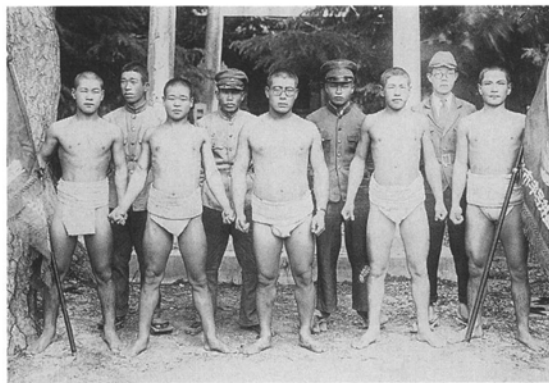
2代目宝岩竹一が若者頭をつとめた。

参加する行事の場所は、牟呂は勿論、吉田方、高師、二川、田原、浜松までも遠征した。

また、協会に入った力士は、地元の祭行事の相撲にはよく出場した。3人抜き、5人抜きで勝つと多くの賞品や賞金を受けた。

また、草相撲の盛んな昔は、大相撲の巡業で力士が不足している時は、この地方の強い力士に出場をお願いして取り寄せた。それがまた、地元の見物人には格好な好取り組みとして場内を沸かせた。

大相撲の巡業の時に限らず出場した力士には給金(日当)が支払われたが、この日当は普通の人の3倍程度支払われた。



青年団相撲大会(昭和15年)

戦後はスポーツが多様化し、陸上競技、相撲とも衰退していった。この近くで最後に相撲が披露されたのは昭和30年(1955)頃に、牟呂町市道の畑を借りて引退相撲を開いた外神町の豊錦(三世親)で、これを境にして草相撲をとる人はなくなった。これより前、豊橋青年団体育大会の相撲競技も昭和28年(1953)まで開かれていたが、翌年からはなくなり相撲愛好者の楽しみが減ってしまった。

#### 4 庚申講

昭和10年(1935)頃までは、農村を中心と

したどの村や町でも庚申信仰が盛んで、60日に1回巡ってくる「かのえさる」の日に「おこうしんさま」をお祀りする行事が続いた。普通どの庚申(当)も20~40軒ほどである。そして、各字(町内)に2~3の当(グループで、当、堂、党、申、戸の文字をあてる)がある。

町名	名称	碑の場所	庚申塚建立年月日
東脇	林 堂	林 (現東脇一丁目)	享保4年10月11日(1719)
	供長党	見丁塚 (現高良社境内)	宝永年中 (1704~1711)
	東脇当	集会所裏 (現高良社境内)	享保6年 (1721)
	行合党	楽法寺西 (現権現社内)	不明
松島	松 島 庚申講	松島町三昧	木の柱 (庚申塚)

\* 松島は昭和22年2月市場から分離独立



庚申塔(東脇当)

汐田校区では、一般には当番として当家、絵所又はヤド(順番で行事をする家を定めている)でお祀りをしている。

当家では、おこうしんさまの祭りが終わった翌日、次の当家が青面金剛の額(又は掛軸)を借り受けて、新しい棚(祭壇)、菰、注連



縄等を用意してお迎えする。お飾りをした後は、朝は御飯とお茶を上げてお参りをしておこうしんさまの日を待つ。

お祭りの数日前に当家では、講中の家々をまわって当日に会食をするためのお米とお金を集める。当日は午後鉦をたたいて知らせる。

昭和の大戦前までは、おこうしんさまの当日は、字にある共同湯を特別に早くあけてもらって湯を浴びて身を清めてから当家へ出かけた。昔は庚申袴<sup>はかま</sup>を着け正装して出席したが、時代が下がると平服になった。また、一般的にはその家の戸主が出席した。しかし、女の人が出席するようになったのは、戸主が出征して出席することが出来なくなってからである。

お祭りの方法は、同じ汐田校区の中（5つの庚申講がある）でもそれぞれ異なっていて一様ではないが、共通していることは、皆がそろったところで、祭壇に向かって「南無阿弥陀」を繰り返して唱え、更に、当家、同行衆、出席者の家内安全、お家繁昌、無病息災を祈り、輪になって長い数珠をまわす。数珠の輪の中へ入った導師（講中の人から）が鉦を打ち「エー南無阿弥陀仏………」と唱えながら輪にした数珠を右に動かし、講中の1人が数取りの担当をして1回まわすごとに数取板を1枚動かして、10枚になるとき10の位の板1枚に変える。そのように繰り返して、10の位の板が10枚（100回）になると終わりになり、礼拝して元の席へ戻って会食となった。



鉦と百万遍の数珠「東三河の庚申信仰」

会食をしながら農作業のことや、海苔のことなどを話したり、お互いの近況を話し合ったりして午後8時から9時頃には帰宅した。

庚申信仰が一般庶民にまで広まっていった江戸期には、夜中も眠らず明るくなってから帰ったようである。それは道教にいう「三尸<sup>さんし</sup>説<sup>せつ</sup>」で人の体の中に三尸という虫がいて、悪いことをした人は、寝ている間にこの虫が体からぬけ出して天に昇り、悪いことを天の神様に告げて早死にさせようとする。しかし、徹夜をしていれば、虫が天に昇ることができないので告げ口はされず、長生きできるということで朝まで眠らずにいた。

昭和45年（1970）頃から海苔漁場が埋め立てられて、漁業での収入がなくなると勤めに出る人が多くなり、次第に庚申の講から離れるようになって人数も減少して存続できなくなり、その講の代表の人が大阪の天王寺（天王寺区の庚申堂）へ御影像をお返しして講を解散する所が多くなった。しかし、現在も伝統行事として回数を少なくして続けている講（林堂、供長党、行合党、東脇当）がある。



御影像「東三河の庚申信仰」

## 5 秋葉講

秋葉さまの本宮は、静岡県の春野町（浜松市）の秋葉山にある旧県社で、祭神は火之迦具土神である。防火の神として有名で特に近郷近在からの参拝者が多い。

本校区も牟呂校区と共に11月頃には、町の役員や新築の家庭、希望者を募集しバス2～3台で参拝を行っている。そして拝殿でお祓いを受け町内のお札をいただいて帰る。

戦前は家を新築したり、不幸にして火事にあった家の親族などは車で袋井駅まで行き、後は歩いて秋葉神社へ参詣し、お札とお砂を受けて帰り、お札は神棚かお勝手におさめ、お砂は屋敷の周りへまいた。



秋葉社

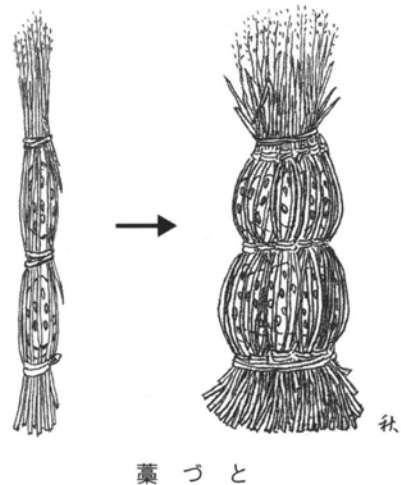
東脇では、毎年12月初め牟呂八幡宮南境内の秋葉社で祢宜様を招いて祭礼を行っている。餅投げがあり、その後は各戸にお札が配られ防火の喚起に努めている。

## 6 神送

旧暦10月1日（新暦では10月末頃）、以前（昭和30年（1955）頃まで）は当地方でも神送りの行事が家々で行われていた。出雲の国（島根県）では10月を神在月、出雲以外の国

では神無月といった。また、当地方ではこのことを「神送様」というように親しみを持って呼んでいた。

昭和の大戦前までは、どの家でもこの日に赤飯を炊き、藁のつと（新藁の根元に近いはかまを取り去り、1握り程度の藁の根元を揃えて縛り、まず赤飯の小さいおにぎりのようにしたものを、藁で包むように巻いてその上を縛り、更に、もうひとつ上部を同様にしたものを作る）を閏年は13本、平年は12本作って大きい束に結ぶ。



それを神棚か神棚の下の床の間へお供えして出雲大社へ出立される神様をお送りした。

この藁のつとは、神様に持参していただくためのものといわれている。

また、この日は赤飯を重箱に詰めて親戚などへも配った。

家によっては、この他に、<sup>なます</sup>脛やけんちんを作って神棚へ供えた。しかしこの行事もいつからか行なう家はなくなった。

この藁のつとの赤飯は、翌日から学校が引けて帰ると、よくおやつ代わりに取り出して食べた。

## 汐田校区歴史写真集



牟呂八幡宮

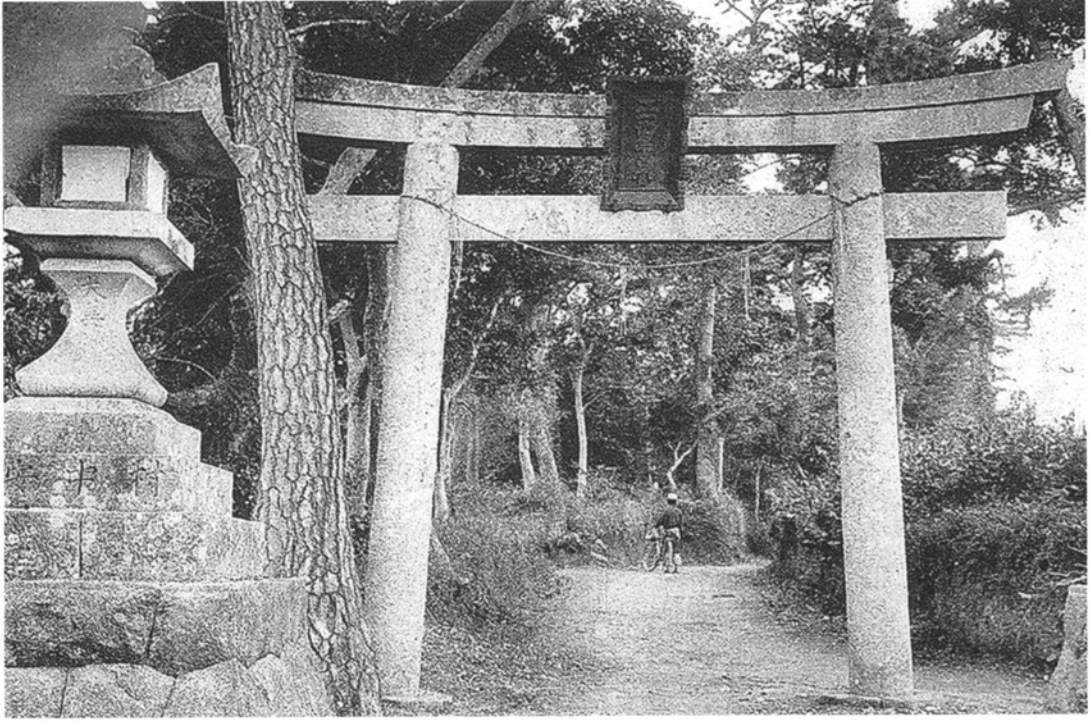
明治から大正時代「渥美」



耕地整理後の田園

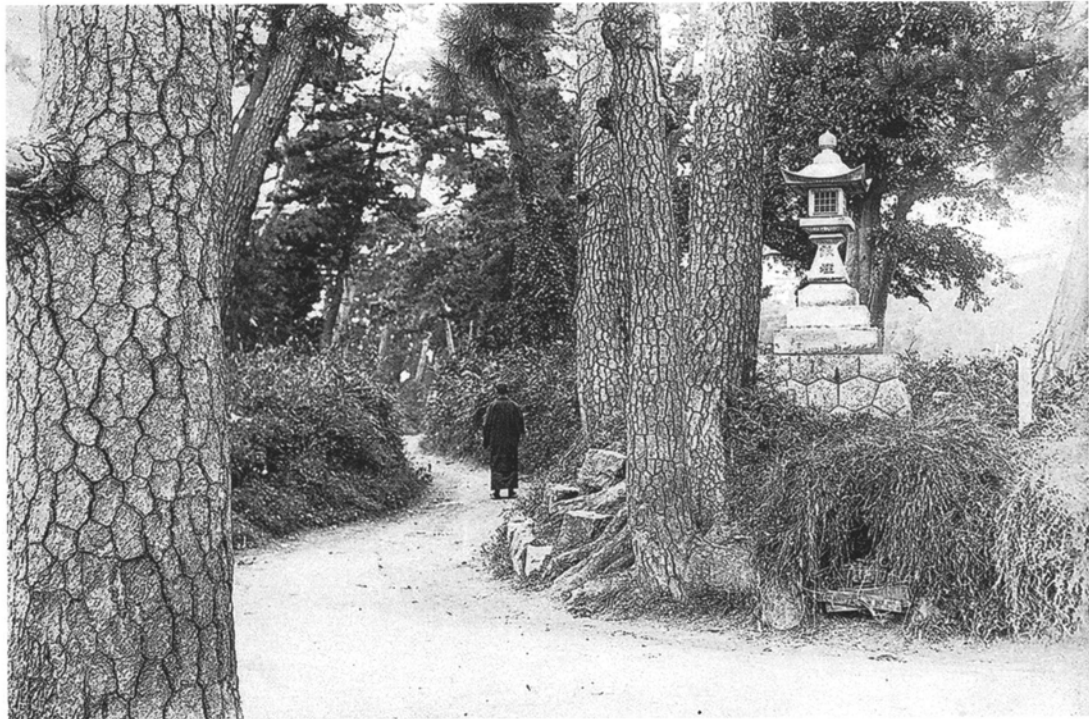
遠く八幡宮の森を南からのぞむ（左が南大門、右が東大門） 林 栄美氏蔵





南大門（現 東脇四丁目）

林 栄美氏蔵



東大門（現 東脇一丁目・往完町郷社東）

林 栄美氏蔵



西大門（現 東脇一丁目・牟呂外神町）

林 栄美氏蔵



高良社御遷宮の山車（現 東脇一丁目30番地あたり）

昭和46年10月



権現社（現 東脇四丁目13番地）

昭和38年12月

区画整理により右と奥の部分は樹木が切られて明るくなっている



集会所裏（現 東脇四丁目10番地あたり）

昭和30年頃？

中央の煙突は初代東脇共同湯 杉浦 一氏撮影





牟呂苗圃（現 東脇二丁目4番地）

昭和48年10月

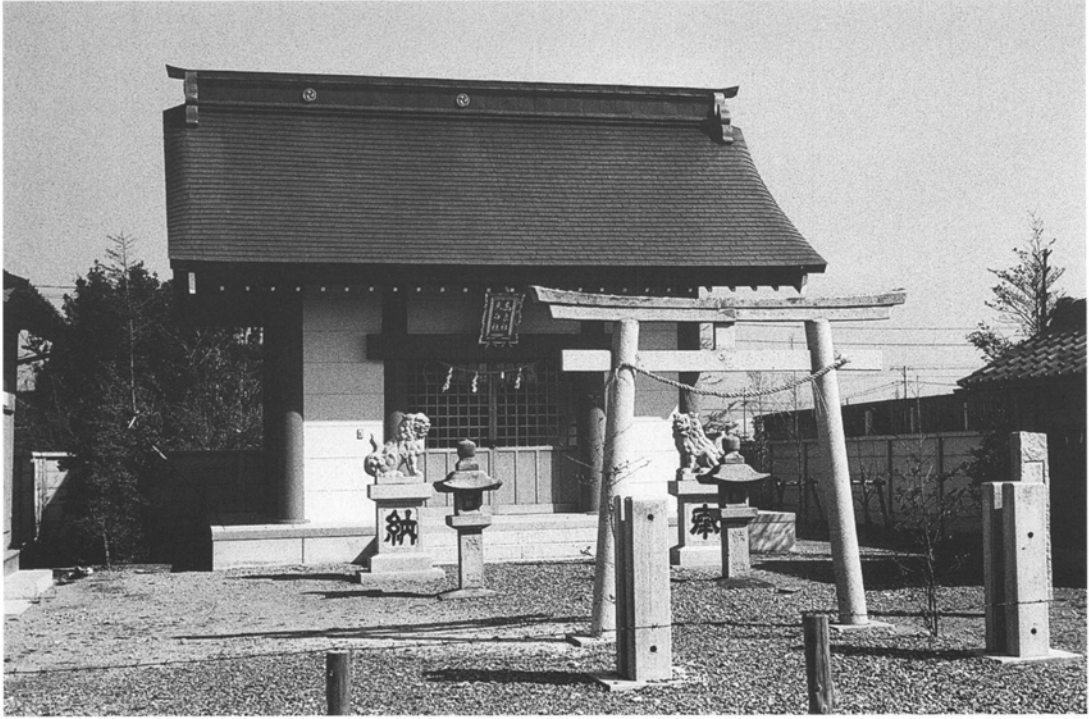
現在の東脇公園（宇宙公園）



東脇共同湯（現 東脇二丁目10番地）

昭和48年8月

区画整理で移転新築した共同湯（昭和48年12月に解散）



高良社 (現 東脇四丁目 1 番地)

昭和48年 2 月



松島社 (牟呂町松島12番地)

昭和48年 2 月



神野新田長屋門（神野新田町会所前66番地）

昭和38年9月

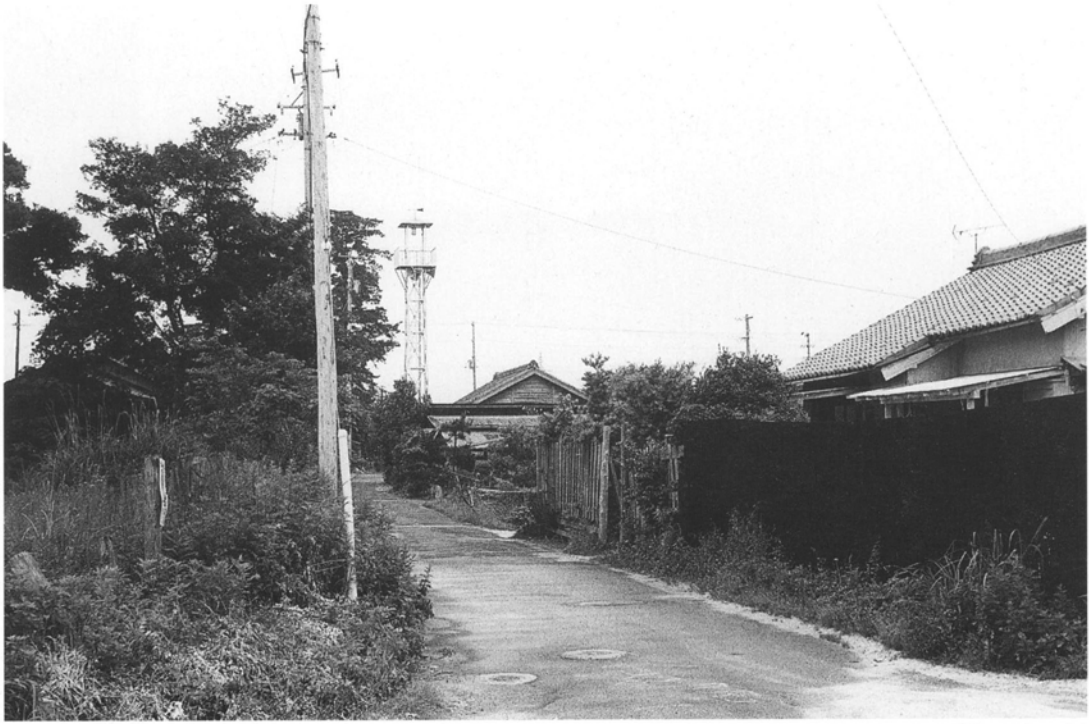


松島の弘坊堂と旧道

昭和48年2月

中央の小さい建物が弘坊堂、その右が旧道





松島公民館前通り

昭和51年3月



師団都市下水路

昭和51年3月

師団下水路を南から川下をのぞむ

汐田校区旧字名略図 (牟呂校区等を含む)



『豊橋市(旧牟呂・吉田方)土地宝典』昭和12年6月発行

## 編集後記

このたび、豊橋市制施行100周年記念事業として、全市で校区史を作ることになり本校区も参加しました。

汐田校区も歴史や文化について、記録し残すことは意義あることで、現在明らかなものをまとめ、校区の方々にその状況を広く知っていただくため冊子にまとめました。

地方史を書くのには多くの人で担当を決めて、あらかじめ数年間かけ関係資料を収集し、文書や写真、道具等を集め、また、校区の方々に聞き取り調査をし、文章にしていますが、今回の校区史は1年半の短期間にまとめ、ページ数も少なく満足なものではないと思いますが、多くの方々の協力により刊行することができました。

項目等も与えられた中で書いたので、読んでいただく校区の方々の中には、物足りない部分を感じることもあると思いますが、多くの写真等を入れることでわかりやすく、気安く読んでいただけるよう心掛けました。

校区の皆様が、この冊子をご覧いただくことで、この地域の歴史に多くの方が興味を持ってくれるきっかけになれば幸いです。なお、資料を提供していただいた方、調査に協力して下さった方々に、厚く御礼申し上げます。

## 汐田校区史編集委員

### ■委員長

宇野 伸一

### ■委員

岡田 昭尚	森田 勝三	大塚 忠男	杉原 興一	伊藤 健一
竹本 尚史	伊藤 忠重	谷山 良昭	角谷 正	森田 一雄
岡田 正信	早瀬信一郎	味岡 達也	山内 克浩	

### 校区のあゆみ 汐田

平成18年12月25日発行

編集 汐田校区総代会  
汐田校区史編集委員会  
発行 豊橋市総代会  
印刷 共和印刷株式会社

R2100  
古紙配合率100%の再生紙が  
採用されています。

PRINTED WITH  
SOY INK™  
Soy Ink is a trademark of American Soybean Association.





